



增補  
改正  
俳諧時記葉草  
二





增補俳諧歲時記稗草

東京 曲亭主人纂輯 藍亭青藍增補

**夏**

漢書律曆志太陽者南方南任也陽氣任養物於時為夏夏假也物假大乃宣平

炎帝

帝淮南子南方火也其帝炎祝融神

禮月令夏月其帝炎帝其神祝融祝

融顓頊氏之子曰黎為火官正者 昊天

纂要天曰昊

朱明 爾雅夏為朱明一曰長贏 註氣赤而光明故曰朱明

煎炒

韓文自從五月困暑濕如坐深甕 煎炒說苑湯之時大旱七年確拆川竭煎

沙爛

**四月**

仲呂 律月令律仲呂高誘註曰陽散在外陰實在中所謂旅陽成功

立夏

孝經緯穀雨後十五日 躡踵 通俗志作躡 躡 廣義躡躡

四月

小滿 月令廣義立夏後十五日斗指巳為小 滿四月中小滿者物長于此少得盈滿也

余月

爾雅疏秋 乾月 月令廣義四月卦乾五陽 決還一陰陰變而為純陽

乾天

正陽月 西京雜記陽德用事 巳月 晉書樂 和氣皆陽為正陽月 志夏正建

四月為巳

首夏 初夏 孟夏 元帝 卯花 纂要





ふ新御供社家松本氏調進ス神輿五基ニ供まらるる  
己の刺をうり神輿五基御旅所の西に出了東寺の南  
門此内に入る此所不於床をわき五社の神輿おのり  
南にむかひ其の上ニ安置ス寺僧おのり御供所侍す  
らよ於て東寺の役人甲冑を着し左手に長刀を横た  
へ右手に御供餅をさげまゝ東寺地人の妻四人寺  
中頭屋院より雑品供物を唐櫃ニ盛置頭上より  
未て神輿毎ニおのりを供し寺僧一人檀上より進出  
て奉幣あり又護符を修ス一座終り後社家并氏  
子供奉り北北方大宮通りを経て五条松原より五条の  
橋を過ぎ大和 龍頭 俳諧歳時記云羽倉家譜桓  
大路々本山三入 太 武天皇御宇の人荷田氏乃

祖山城國稻荷祭の時神輿のまきへりるる面を龍  
頭太と云その外は祭乃假面々王比鼻と称を龍頭太  
々田中の社乃神職あり其の面則ち龍頭太が伊勢  
作あるを以て名づけたるあるなり云

### 神衣祭

十四日 公事根源神衣祭ハ神祇令の  
せあり神服部潔齋と三河乃  
赤引此神調の糸を以て神衣をおる又麻績連と云氏  
人麻をうみて和妙荒妙を織り神明奉ふを神衣此  
祭とちやあり 忌さす 加部神祭 岩梨 和漢  
延喜式等々 此条より出 三才

苗会江州三井寺の山中に有苗の高サ二三寸葉の大サ  
瓢樹の葉乃如ちやと云はれ地は掘り生ず二月小白  
花をむら虎耳草花に似たり三月実を結ぶ青大  
豆の如くわけて四し敷頭攢り生ず楊梅の様に葉  
此交ひは裏まふ外色青く内紫黒色 覆盆子  
小児皮を剥て食ふ味微酸く甘し 草本

蔓三鈎刺のり一枝五葉葉小うりて面背皆青く光呈  
薄くして毛あり白花をむら四五月実のふ子を成  
ると蓬菓なりも小く稀疎に生あるとき黄あり  
熟すれば烏赤 本草附注子覆盆子の形に似たり故小  
名之 蓬菓覆盆子 薊樹 和漢三才圖會  
薊 蛇苒等名もよき五種あり 石藤 芫花 俗云以花  
葉並小藤に似て小一三月花をむらく紫色或は白  
花々又草藤上此説のこり紫花白花の二種あり  
三月々四月に至り花をむらく又一種夏藤あり黄  
白色蔓葉花あはれも紫藤に似く小一山州山科  
此近道に往く有り 大和本草 本草凡物の  
四月花をむらく 馬藜 大和本草 馬を以て名  
くと云日本もてを相似て以て名を大と云大  
蓼天山椒大黃楊もといふいぬ蓼の葉は黒点あり 芋

植る 芋の注秋部 紫羅傘 本草苗經 紫羅  
葉射干に似て花の色紫碧抽出す其根を鸞頭と云  
薬に入る 鸞尾を燕子花の類なりと花早くむら  
白花もいふ 石解花 或は石薺と作る 本草石上小  
石 葉生し皆青色乾くと黄色紅花をむらく節  
の上より根鬚を生し亦折下して砂石を以て裁之  
或は物を以て盛置屋下は掛頻り水洗に水を以  
て今年を経て死む俗に称して千年潤石薺と云 蘭  
化 本草 虎鬚草一名燈心草古は即ち竜の鬚と云  
粗し但竜の鬚を堅小くして 薺実を此草ハ稍  
粗し 薺虚く白く吳人裁之時薺を取て燈柱と  
と艸を以て席及び蓑を織る 和名抄 蘭和名為并色

夏 三

立成云 五月 印地打 世諺問答 今日童の小弓  
警尻刺 何の故にや答むう左右の馬場う馬小騎う

射るうの侍るんむをるまの目ちとちうは是ホや始  
とち中べうむ 紀事 児童柳比木を以て大小の刀を

作りしを首蒲刀と云男児を腰に横たへ頭  
中を着て山伏乃体ふとをひ腕又及鴨河の辺

出て左右に列置標を擲く相戦ふ是を印地と云  
江東佐々木の社の 守宮を搗 武帝記

祭礼五月五日今印地打 守宮を搗 端午乃  
日守宮を取て飼ひ丹砂を以て体を赤く画き次は

歳此日搗之人の臂に塗ふ犯さるるを消ぬ故に  
守宮と云 生玉乃流鏑馬 五日 神社啓蒙生玉

郡天王寺の辺に祭る處乃神一座天生玉神あり  
社家註進明應年中本願寺の僧侶乃所より来りて寺

院をよめ神地を掠め境内に接すをよりて  
神その不潔を惡かり僧を罰を僧おそれて神殿造

替此宿禰を以て神主藤原吉勝は侍きて願辭を告  
く數日みく僧は病愈ゆ遂に神殿を今の旅店の廻

里山迂奉其後信長は兵火より里を焼く灰燼  
吉城廓を築く刻今乃地に遷す 紀事追加 今日午

乃刺流鏑馬有門外も鳥居の方へ馳其裝束腹帶  
陳羽織を着一只一 今宮祭 九日あり今 山城國

紫野より祭る所牛頭天皇 諸神記 正曆五年六月  
廿七日疫神を船置山に安置せし長保三年五月九日

疫神を紫野に遷座せしる靈夢の告ふよりてん京師此  
衆庶御靈会を行ふ 紀事 午時神輿二基相殿の宮各

旅所に出ツ相殿の宮ハ一説愛宕の宮之古へ愛宕権現  
鷹ヶ峯より遷此社を今に愛宕山に移も一条院御

宇勸請す愛宕卒社地主神之故に移社と云 神幸の日  
鋒十二本あり九鋒を出すの所より遷別當供奉し

氏子相從ふ 神幸小川通りも元誓願寺  
大宮通りを過船置山の北麓を過て本山に入る 六月

忌火御飯 江次第 忌火御飯 六月十日 以御  
和布御汁一坏 累 公事根源 内膳司より奉まふて大

床子の御座より供まふる景行天皇此御時よりま  
る忌火と云火を忌む心あり 神事あり此時を不浄

此火をうちかふるこもやされ八月次神今食の御神  
事を今日より始 嚴島祭 十五日 藝州佐伯郡宮

めらあふる 嚴島祭 島に祭る所  
れ神三座市杵島姫神田心姫神湍織津姫神 或書  
云推古天皇の御宇播磨國の住人内舍人佐伯乃鞍

職當國ニ左遷ス恩賀の島より時紅帆の船来る船  
れ中瓶の瓶の中鋒を立赤幣を着りち三女

無双の絶景今通しと宮島と号す○池の御前同國  
安藝郡ふらさき嚴島と同一神体人毎年六月十七日  
夜つづくはれ神輿船舞樂と奏し此は渡屋あま  
を清會と云平相國清盛靈験をんくこを建立を  
其後弘治二年陶晴賢滅亡の時兵火よりかくり  
つたて毛利大膳大夫元就再興廻廊周百十八間  
つりと云例祭六月十五日より十七日に至る先づ神前御  
池より管絃乃船を組む舸三艘を舸ひて座を張渡  
藩を結ひ竹まき樓を作し花と灯籠を釣へ前後挑  
灯數多きを飾ふ十七日御船濫申比刻件乃舟を  
大鳥居の正面より架出し管絃あり夫より外宮小押  
渡り酉刻より管絃あり供僧伽陀并舞樂畢て御船を  
嚴島へ漕戻し長濱の沖より奏樂を亥刻頃大鳥居  
れうち小漕入る六月月上旬より諸方の商人あつまり十  
五日より群集又こを町入と云  
るそとハ嚴島道芝記に云

### 伊勢祭禮

十六日  
十七日

延喜神祭式六月十六日度會宮を祭十七日太神宮を祭  
る其儀十五日黄昏以後称宜諸内人物忌等を率  
て神此御雜物を陳列し詔て亥時夕膳を供し丑時  
朝膳を供し称宜内人等歌舞を奏す云十七日太神  
宮を祭る其儀一度會は同一云○外宮十六日内宮十七日  
おまをもち京師より御奉納此神宝を神主神殿へ  
捧るとも宮殿此御戸を開く是を拜せんとて諸人群  
衆を奉り今日出家四頂の者をいひ  
許るを参詣あしむと云り  
秋名泉をいづる水ありつる  
泉殿 瀧殿 泉水此  
のほとけのつを略す云々

神泉苑も滝殿有源氏松風巻なきのありたふと云  
と云  
**井戸替** 改め冬至を鑿て火を改め瘧  
疫を去す○さら井戸を改めを云夫木松が根  
を改めを云

**芍薬** 此草備後国は多し川を流す  
委々ハ四月瀬花の茎を云見ふト  
白麻芍 和漢三  
才圖会

**標の花** 時珍云二種  
あり一種は実  
是雄雌がまらるとも一本草及び  
和の説にもよる証もまらる  
を標を其名を越すと云一種は実を結ぶ其名を標と云  
其実を標と云其葉儲の葉の如く文理解あり皆斜に勾よ  
四五月花を開く粟の花はむと黄色天和本草今按む  
は標の木に儲は似て同類異物なり其木の高三二丈実も  
備後

**六月會** 或傳教會長講會と  
云六月四日を云  
公事根源を云の傳教大師の忌日勅使登山の傳あり○山  
家説云六月八日弘仁十四年始て行なる建曆三年勅して  
御齋會は准せらるる○宣命使あり○叙最澄姓ハ三津氏近  
江滋賀郡の人あり神護景雲元年に生れ弘仁十三年六月  
四日寂す年五十六貞觀八年八月勅して傳教大師と謚す  
此会ハ叡山の谷と論あり会場一院づつ年番あり十一月

夏は五

天台会も 同事あり **は四月鼻高祭** 八日大和名所記 毎年四月八日

南都興福寺中門より仏生会をもちあふ俗人舞樂あり其舞の中陵王の舞を奏せり其面の鼻高きをこて俗に此法会を呼ぶ鼻高祭と云ふ

**花御堂** 高野の花供之部 佛生部 花摘 花御堂開帳の条

**花供** 高野の花供之部 佛生部 花摘 花御堂開帳の条

**梅天** 杜甫詩南京西浦道四月熟黄梅

唐入成都を以て南京と云ふ則蜀中へ梅雨乃ち四月に在是四月の梅雨を云ふ熟梅

**葉柳** 本草春初柔荑を生す即ち黄蕊花を開く春

天黄梅天ふくも云ふ

**葉櫻** 才大呂一派の葉櫻を春と云ふ蕉

長成を云ふ 門諸流は四月とせし首夏の新緑

**たつ見草** 卯花の異名 藏玉

鳴け **花柚** 大和本草一種花柚と云ふ其実小なり

又貴と云ふ 和漢三才圖會花白く微丁

**白丁花** 香の気あり故に俗に白丁と云ふ

又樹高サ二三尺枝莖勁く葉は均黄揚ふ似たり四月小白花をわく大サ三分ばかり一種千葉のあり枝莖を折すと

王 **牡丹** 白居易集牡丹芳花開花落二十日一城之人

丹を謂て花王と云ふ今桃黄ハ真其王やと魏紫ハ其后也

**花宰相** 芍薬と云ふ本草 花品中牡丹を以て第一芍薬を花宰相と云ふ

**蓮の菖** 同上菖蒲泥を穿て白芍薬を成る

**の浮葉** 荷葉清明の後初水

**飛蟻** 和漢三才圖會

**初松魚** 東医宝鑑松魚性平

**兼三夏物** 和漢三才圖會

**早鮎** 是又一夜鮎といふ

**蠅虎** 同上

**蟻** 同上

**蠅** 同上

**蟻** 同上

**蠅** 同上

**蟻** 同上

**蠅** 同上

**蟻** 同上

**蠅** 同上

**蟻** 同上

**蠅** 同上

**蟻** 同上

殊あり専ら蠅を捕へて喰之  
ちを蠅虎と云ふ  
**方目鳥** 和漢三才圖會 正字、按は大き坊の

如く黒色短き尾、赤き脚、長く正青、上唇  
田沢は夏月鶴を以て上饌、味美、又大鶴、形も鶴に  
似、大之形色、少異、今雅集註 鳩、即ち護田鳥、あり人をみ  
る時を啼く、主の官を守り、似たり、あり、ゆへは名之、

**苜蓿** 藎、頌曰根叢生を作、葉每二十莖あり、莖は赤きあり、黄あり、有七月黄花を結ぶ、陶弘景  
**水馬** けり部、競渡の条に注す

**半夏生** 本草、半夏一名守田、礼月令、田五月半夏生、蓋當夏之半、故名、守田、月令、廣義、半夏、葉草、夏の半、居て生、  
**反舌無聲** 月令、五月、中より十一日を半夏生と云、

**花菖蒲** 白菖の属、其葉水菖蒲より色淡青、水陸、宜し、共、叢生、五月一莖を抽、下莖、端は花を生、形状、蓮子花の如く、紫、淡、紅、白、水の、数色、有、最も、愛、敬、を、受、水菖蒲、は、似、花、を、し、故、花菖蒲と云、

**紫羅襪花** 本草、白菖二種あり、一種、池、沼、生、を、白、菖、と、云、俗、は、泥、菖、蒲、と、云、一種、は、溪、間、に、生、入、根、瘦、赤、節、稍、密、あり、その、溪、孫、より、俗、是、を、水、菖、蒲、と、云、和漢三才圖會、白菖、は、葉、花、皆、燕、子、花、に、似、瘦、花、つ、こ、

初蟬 の、あ、し、こ、と、云、説、も、あ、り、物、の、陰、極、は、四、出、の、花、を、む、き、あ、ら、む、か、つ、と、云、是、は、田、字、草、の、こ、と、云、  
**羽拔鳥** 凡、法、鳥、五、月、羽、毛、  
**羽拔鴨** 凡、法、鳥、五、月、羽、毛、  
**六月** 新六、夏、草、の、野、沢、

**博多祭** 十五日、博田、櫛、田、の、神、社、に、筑、前、国、那、珂、郡、三、有、祭、の、所、の、神、中、殿、に、櫛、田、姫、命、或、説、

大若子命、勸請、天平、宝、字、元、年、右、殿、に、祇、園、牛、頭、天、皇、勸、請、天、慶、五、年、左、殿、に、天、照、皇、太、神、宮、勸、請、年、月、詳、あ、り、件、の、三、神、相、殿、あり、正、月、八、日、正、大、般、若、を、修、す、六、月、十、五、日、祇、園、會、十、一、月、二、日、卯、日、新、嘗、會、今、六、月、十、五、日、祭、礼、を、行、ふ、古、ハ、十、六、年、永、享、四、年、六、月、十、五、日、始、て、祭、之、作、山、六、基、大、サ、京、師、祇、園、會、の、山、は、四、倍、と、云、右、山、次、弟、二、上、張、り、組、上、に、階、上、九、百、人、を、居、ら、む、一、基、を、引、よ、り、九、千、人、を、引、よ、り、木、偶、人、は、鎧、を、着、せ、階、上、に、立、其、甲、冑、は、皆、姓、名、を、書、あ、り、故、に、故、に、領、主、の、家、臣、我、あ、り、と、云、

**橋立祭** 五、日、風、土、記、丹、後、國、与、佐、郡、良、の、方、は、速、石、里、あり、里、中、は、長、き、大、崎、あり、長、サ、二、千、二、百、二、十、九、丈、廣、サ、九、丈、二、尺、是、を、天、橋、立、と、名、つ、く、云、又、ハ、久、志、濱、又、ハ、久、志、之、浜、と、名、つ、く、拾、芥、抄、智、恩、寺、ハ、是、レ、切、方、文、珠、安、置、の、道、場、と、云、天、竜、六、齋、燈、明、を、供、也、紀、事、追、加、六、月、廿、五、日、丹、後、切、戸、の、文、珠、會、同、橋、立、祭、云、文、珠、會、橋、立、祭、同、事、云、天、橋、山、智、恩、寺、ハ、延、喜、四、年、甲、子、勅、一、山、号、寺、号、を、あ、ら、む、莊、田、を、賜、ふ、ち、四、百、余、年、を、經、嘉、曆、年、中、嵩、山、禪、師、住、持、ス、是、禪、利、の、始、夫、より、三、百、余、年、住、侶、詳、あ、り、寛、永、年、中、国、主、京、極、高、廣、別、源、禪、師、を、請、一、住、持、せ、む、是、より、洛、の、妙、心、寺、に、属、也、寺、領、五、十、石、余、文、珠、堂、ハ、巽、向、一、明、曆、年、中、

**博多祭** 十五日、博田、櫛、田、の、神、社、に、筑、前、国、那、珂、郡、三、有、祭、の、所、の、神、中、殿、に、櫛、田、姫、命、或、説、

**博多祭** 十五日、博田、櫛、田、の、神、社、に、筑、前、国、那、珂、郡、三、有、祭、の、所、の、神、中、殿、に、櫛、田、姫、命、或、説、

**博多祭** 十五日、博田、櫛、田、の、神、社、に、筑、前、国、那、珂、郡、三、有、祭、の、所、の、神、中、殿、に、櫛、田、姫、命、或、説、

**博多祭** 十五日、博田、櫛、田、の、神、社、に、筑、前、国、那、珂、郡、三、有、祭、の、所、の、神、中、殿、に、櫛、田、姫、命、或、説、

**博多祭** 十五日、博田、櫛、田、の、神、社、に、筑、前、国、那、珂、郡、三、有、祭、の、所、の、神、中、殿、に、櫛、田、姫、命、或、説、









生ありあせを  
通し鴨とりよ  
**五月 桃印符** 統漢書 桃印の本  
を止む今の世端午は保備符を以て相問遺るす以て屏  
帳の間に置く本草 風俗通云東陽度朔山は大桃あり千里  
は蟠屈ス其北三鬼門あり二神  
是を守り以て凶鬼をふせり **蟪螂生** 月令小暑 **虎**  
娘子曾我祐成は相別る涙を以て雨と云ふ故今  
が雨

尾花うもをよ秋風をよ此青曾我物かこりよ又  
**照射** 祓の神魁符 **六月 土用** 月令中央土其  
四時寄旺する各十八日共七十二日此を除くとき木火  
金水も各各七十二日四時よあはらるる故之を  
伍多し専氣をよく辰戌丑未の未は寄旺未の月火金  
の旺あり又一歳の中は辰戌中央土一令を以て五行の  
序をよ **土用干** 五神虫干 **虎尾草** 大和本州  
の如く長く委り又徐長卿は似て莖の長さ二尺余夏  
秋白花をひきき穂をよ形も獸の尾の如く花紅白  
の二種あり秋の中葉  
よ所説あり **時計草** 出竹本よりつぎての  
は又葉切込ありては葉の如く花形てせん風車に似  
たり朝四つをよ花開き暮六つ萎むとの次の答又明日  
は花の一日あせり相繞て盛久し花ひらきよき様子  
傀儡假を採るが如く四つをよ久髪葉あり上下へ葉も

あり其てよ汁の搾るよ ○ **東陵瓜** 後漢書 東陵  
侯之秦亡びて布衣となり家貧く瓜を長安城の東は種瓜五  
色あり甚美なり世は是を東陵瓜と云 ○ 又支那の瓜は東門青門  
赤の名あり **藕突** 和漢三才圖會 藕ハ鳥を藕所以  
耶平が故刺あり の名あり其樹數種あり深山あり  
る葉大より子を結むるも此藕としてよ子を結ぶを此  
藕として少あり其色もろろ木葉女貞に似て薄く光沢あり  
四時潤をよ尺二三分葉をよ四五月細き白花をひき子を  
を結ぶ四田子て熟をよ紅色攢り生る其木の皮を剥き水よ  
浸し爛りて是を流水に濾て皮渣を去せ粉筋の **心太**  
如く其甚稠粘る人用て鳥雀を粘き是を藕といふ  
和名抄 大凝菜 和名 古留毛波俗二用心太二字云古古呂布止  
○ 本州 瓠枝 本朝式 凝海藻 閩書 石花菜 海石上よ生る  
性寒 夏月よあせ  
を煮て凍とあせ **ち** **四月 地主祭** 九日 庚寅  
安四年四月九日庚午清水地主権現祭へ神輿午刻還向あり  
其後獅子舞をよ田楽の舞をよ ○ 雍州府志 地主古ハ旅  
所白山通五条の北あり今石地蔵の存る所祭日暫し神輿  
を徑書堂の前は居是旅所の義を表する清水縁起祭る  
神田村將軍の墓あり弘仁三年四月 **芭莖** 田圃家圃よ  
延鎮奏して清水寺の鎮守とあり 多く栽三月  
莖を起し莖肥中空くを脆しあせを折せ白汁あり葉  
毎よ莖を抱へ相重りて又をよ五月黄花をひき初ては  
る野菊の如く一花子をむきよ **茶挽草** 和漢三才  
と鶴虱の子は云々云云 固会雀葵  
茶挽草 田野よあせ生るてくかせて苗葉小麥に似て弱小  
之穂細く小兒穂粒を爪の上よ載せぬ施回するると茶磨を

あり其てよ汁の搾るよ ○ **東陵瓜** 後漢書 東陵  
侯之秦亡びて布衣となり家貧く瓜を長安城の東は種瓜五  
色あり甚美なり世は是を東陵瓜と云 ○ 又支那の瓜は東門青門  
赤の名あり **藕突** 和漢三才圖會 藕ハ鳥を藕所以  
耶平が故刺あり の名あり其樹數種あり深山あり  
る葉大より子を結むるも此藕としてよ子を結ぶを此  
藕として少あり其色もろろ木葉女貞に似て薄く光沢あり  
四時潤をよ尺二三分葉をよ四五月細き白花をひき子を  
を結ぶ四田子て熟をよ紅色攢り生る其木の皮を剥き水よ  
浸し爛りて是を流水に濾て皮渣を去せ粉筋の **心太**  
如く其甚稠粘る人用て鳥雀を粘き是を藕といふ  
和名抄 大凝菜 和名 古留毛波俗二用心太二字云古古呂布止  
○ 本州 瓠枝 本朝式 凝海藻 閩書 石花菜 海石上よ生る  
性寒 夏月よあせ  
を煮て凍とあせ **ち** **四月 地主祭** 九日 庚寅  
安四年四月九日庚午清水地主権現祭へ神輿午刻還向あり  
其後獅子舞をよ田楽の舞をよ ○ 雍州府志 地主古ハ旅  
所白山通五条の北あり今石地蔵の存る所祭日暫し神輿  
を徑書堂の前は居是旅所の義を表する清水縁起祭る  
神田村將軍の墓あり弘仁三年四月 **芭莖** 田圃家圃よ  
延鎮奏して清水寺の鎮守とあり 多く栽三月  
莖を起し莖肥中空くを脆しあせを折せ白汁あり葉  
毎よ莖を抱へ相重りて又をよ五月黄花をひき初ては  
る野菊の如く一花子をむきよ **茶挽草** 和漢三才  
と鶴虱の子は云々云云 固会雀葵  
茶挽草 田野よあせ生るてくかせて苗葉小麥に似て弱小  
之穂細く小兒穂粒を爪の上よ載せぬ施回するると茶磨を

あり其てよ汁の搾るよ ○ **東陵瓜** 後漢書 東陵  
侯之秦亡びて布衣となり家貧く瓜を長安城の東は種瓜五  
色あり甚美なり世は是を東陵瓜と云 ○ 又支那の瓜は東門青門  
赤の名あり **藕突** 和漢三才圖會 藕ハ鳥を藕所以  
耶平が故刺あり の名あり其樹數種あり深山あり  
る葉大より子を結むるも此藕としてよ子を結ぶを此  
藕として少あり其色もろろ木葉女貞に似て薄く光沢あり  
四時潤をよ尺二三分葉をよ四五月細き白花をひき子を  
を結ぶ四田子て熟をよ紅色攢り生る其木の皮を剥き水よ  
浸し爛りて是を流水に濾て皮渣を去せ粉筋の **心太**  
如く其甚稠粘る人用て鳥雀を粘き是を藕といふ  
和名抄 大凝菜 和名 古留毛波俗二用心太二字云古古呂布止  
○ 本州 瓠枝 本朝式 凝海藻 閩書 石花菜 海石上よ生る  
性寒 夏月よあせ  
を煮て凍とあせ **ち** **四月 地主祭** 九日 庚寅  
安四年四月九日庚午清水地主権現祭へ神輿午刻還向あり  
其後獅子舞をよ田楽の舞をよ ○ 雍州府志 地主古ハ旅  
所白山通五条の北あり今石地蔵の存る所祭日暫し神輿  
を徑書堂の前は居是旅所の義を表する清水縁起祭る  
神田村將軍の墓あり弘仁三年四月 **芭莖** 田圃家圃よ  
延鎮奏して清水寺の鎮守とあり 多く栽三月  
莖を起し莖肥中空くを脆しあせを折せ白汁あり葉  
毎よ莖を抱へ相重りて又をよ五月黄花をひき初ては  
る野菊の如く一花子をむきよ **茶挽草** 和漢三才  
と鶴虱の子は云々云云 固会雀葵  
茶挽草 田野よあせ生るてくかせて苗葉小麥に似て弱小  
之穂細く小兒穂粒を爪の上よ載せぬ施回するると茶磨を











あせを  
六月 綿花 和漢三才図会 四月種を下と、莖  
は三本あり、根の葉如く、秋に入ると花をひく、葉の花の如く、  
て小く、紅葉の如く、実を結ぶ。○此の種を下すと早晩あり、  
花も又同じ、夏の末に花開くものあり、大底  
黄蜀葵に似たり、淡黄色、四月種すの条

田祭 上巳日○或説、祭の日の己祭、神詳、淡海  
今堅田と云、出来高、その地伊豆の三島の風景に似たり、故伊豆権  
現を勧請と云、古くは伊豆権現の祭あり、今土人もこれを  
志すものあり、今土人本居神と云、天文六年九月廿五日、江州觀  
音山の城より、衣川に勧請せし天神の社は、四月子の日祭あり  
里、今上の己日なる所、神田明神、堅田の城主  
一代江戸に誕生す、故に神田明神を其所に勧請す、

開帳 月参、藤家業、戒壇堂を建、  
よの宣言を帯て登山を傳教、喜悦よと云、閏六月十日、殊に  
勅詔を下して、創め戒壇を築、十四年四月十四日、修禪和尚を  
真、始て受戒を行ふ、云、此事四月八日、諸人參詣を、女人ハ常ニ  
敷山に登るを、をえを、あるは今日許す、東坂本の花摘の  
社に詣り、おをを花摘と云、花堂を作りて、小釈迦の銅像を安  
置す、○此社ハ傳教大師の御母堂、妙徳婦人を祭ると云、婦  
人存生の時、大師御對面の為、おの処を登  
山し、今日女人の參詣を、おの遺意と云、  
葵祭、御形日、公事根源、中、酉日又酉ニ、未の日先上卿陣、  
葵柱、諸髪、て六府をめぐり、誓固のよを仰ぎ、當日使々  
近衛の中少將つとむ、昔夢のつげあり、より、人々葵柱の  
髪をわくる、賀茂松尾の社司、前の日より、べき所へたせあり

賀茂祭 賀茂祭、御形日、公事根源、中、酉日又酉ニ、未の日先上卿陣、  
葵柱、諸髪、て六府をめぐり、誓固のよを仰ぎ、當日使々  
近衛の中少將つとむ、昔夢のつげあり、より、人々葵柱の  
髪をわくる、賀茂松尾の社司、前の日より、べき所へたせあり

欽明天皇の御宇より、此祭ハも、下鴨の御祖、上賀茂の別雷  
ニの神祭、この御祖を、玉依姫と云、賀茂の建角身、命の女、  
ある時、せりの小川の、りり、あをひく、川上より丹塗の矢一  
も、ち、あり、れ、下、玉依姫、おの、矢を、し、り、り、我が家の屋根、ま、さ、い、さ  
む、を、を、より、り、り、程、あ、く、も、み、て、男子を、う、む、あ、れ、い、も、父を、た  
せ、い、も、あ、く、さ、り、き、或、と、き、酒を、を、り、り、今、の、兒、は、五、を、こ、を、を、  
汝が父は、さ、せ、と、を、へ、り、を、い、兒、の、五、を、を、空、ま、を、け、て、家の屋  
根を、を、と、や、り、り、我ハ、天神の御子ありと云、天上を、さ、り、り、り、り、  
お、り、り、り、則、別雷の命、是、あり、い、の、丹塗の矢ハ、松尾明神と、後  
は、あ、く、を、れ、り、り、り、紀事、上賀茂中、酉日、葵祭、貴船も、あ、く、修  
之、酉の前午、日、西賀茂、黄、衣の、を、け、榊を、伐り、松も、並、て、御生所  
の、假宮、系、齋宮の、帷の、屋、及び、大宮、假宮を、構、ふ、黄、衣、五、十、人、の  
ま、り、り、結、番、を、あ、り、未、の、日、假宮、遷宮、申、ノ、日、古、ハ、閑、白、詣、り、當  
日、音楽あり、翌日、社司、葵、髪、系、柱、枝を、禁、裡、仙、洞、及、び、高、貴、の  
家、に、献、ぎ、則、御、簾、は、懸、く、賀茂、地、人、悉、く、門、戸、を、掛、く、あ、り、り、り、  
は、夏、天、霹、靂、の、災、あ、り、祭、の、日、官、家、の、人、あ、り、り、葵、柱、を、衣、領、  
よ、か、け、り、り、賀茂、の、地、人、各、を、頭、髪、を、挿、む、今、日、葵、髪、柱、枝、を、  
せ、を、諸、髪、と、稱、す、葵、ハ、静、原、より、取、来、り、桂、ハ、松、尾、より、伐、来、り、凡  
葵、ハ、當、社、の、神、州、より、桂、ハ、日、吉、神、木、より、云、御、生、と、ハ、玉、依、姫  
の、別、雷、命、を、産、む、日、と、云、修、之、実、ハ、申、ノ、日、生、せ、り、り、酉、ノ、日、ハ、神、の  
生、せ、り、り、祝、奉、る、儀、と、も、云、御、形、祭、御、影、祭、を、同、祭、と、云、人、あ  
り、り、別、の、祭、あり、御、影、祭、ハ、三、日、以前、午、ノ、日、ニ、あり、御、影、社、ハ、路、北、高、野  
川、の、東、御、蔭、山、ニ、社、あり、即、ち、下、鴨、の、未、社、あり、康、富、記、嘉、吉、三、年、  
四、月、廿、日、丙、午、鴨、御、蔭、山、祭、あり、云、お、を、酒、ノ、日、ハ、あ、り、り、午、ノ、日、ハ、  
別、祭、と、も、云、河、海、抄、加、茂、祭、の、前、日、垂、跡、の、石、上、は、於、て、神、事  
有、御、形、と、号、す、今、本、宮、の、北、一、町、を、わ、り、り、在、る、御、旅、所、之、道、の、西  
は、岡、み、是、を、御、生、所、の、館、と、  
い、祭、の、日、假、殿、の、所、に、建、す、

神祭 忌、を、神、取、是、加、茂、祭  
を、い、あり、





船を飄し立しとて皆敗走を戦ひて勝り此因縁を以て今に至る五月五日の祭に兵器を用ふ氏家も又志あり藤原社八山州紀伊郡に舍人親王の祠あり弓矢政所と称す是より蓋其ころ蒙古の襲来を國史に云ふ藤原社祭の条見念ふ

**榊餅** 歳事拾遺五月五日米の粉を以てひいて餅の中を餡を入て合せること編註の形のおと一榊の葉を以てつぎ

**賀茂競馬** 五日 詞林米葉或歳内まよとの用ひぬる

馬に乗る志貴島の宮欽明天皇の御宇天下世舉里を風吹雨零時二下部伊吉若日子命に勅してトハヒト乃トハヒテ奏をら賀茂の神の崇へて仍て四月吉日をえし馬に鈴をつけ人猪影を夢りて駢馳して以て祭をふし能禱祀せむ因之穀成就天下豊年之乗馬は始り

**注進略記** 五月五日の競馬ハ七十一代堀川院寛治七年五穀成就天下泰平のゆゑ十番世定馬料を寄らせ例年是を行はれ

**紀事** この日音楽あり午の時競馬あり近衛院康治年中始り行はるる其始ハ臨時の執行の後世五月五日式日とあり

古ハ法社毎は多く競馬あり今漸く絶え存する處を稀なり當社競馬の料ある故今も至て別他を今日乗る處の氏人各冠の纓を巻き鏝を付け左の方赤袍を着し右の方黒袍を着し各南の鳥居の外に於て馬に乗る馬場の未より馬場本に至る先ツ背一番をもむ左右一疋毎に馳走を空走と云ふの後各々ハ馳走遅速を争ひ勝負を決し古ハゆる真手結あり

**文昌** 和漢三雅録軍中端午を以て馬を走らせを踏柳と云

**帷子** 才園会通俗夏月必用の衣九帷子と名づる端午より衣を着るは浅黄色を用ふ七夕ハ朔月白帷子を用ふ近代士庶人の通例あり

**和名抄** 鹿子百合 花律白花紫点あり其花横三向

**和名加** 鹿子百合 開く葉点あるゆゑ鹿子百合

船を飄し立しとて皆敗走を戦ひて勝り此因縁を以て今に至る五月五日の祭に兵器を用ふ氏家も又志あり藤原社八山州紀伊郡に舍人親王の祠あり弓矢政所と称す是より蓋其ころ蒙古の襲来を國史に云ふ藤原社祭の条見念ふ

**榊餅** 歳事拾遺五月五日米の粉を以てひいて餅の中を餡を入て合せること編註の形のおと一榊の葉を以てつぎ

**賀茂競馬** 五日 詞林米葉或歳内まよとの用ひぬる

馬に乗る志貴島の宮欽明天皇の御宇天下世舉里を風吹雨零時二下部伊吉若日子命に勅してトハヒト乃トハヒテ奏をら賀茂の神の崇へて仍て四月吉日をえし馬に鈴をつけ人猪影を夢りて駢馳して以て祭をふし能禱祀せむ因之穀成就天下豊年之乗馬は始り

**注進略記** 五月五日の競馬ハ七十一代堀川院寛治七年五穀成就天下泰平のゆゑ十番世定馬料を寄らせ例年是を行はれ

**紀事** この日音楽あり午の時競馬あり近衛院康治年中始り行はるる其始ハ臨時の執行の後世五月五日式日とあり

古ハ法社毎は多く競馬あり今漸く絶え存する處を稀なり當社競馬の料ある故今も至て別他を今日乗る處の氏人各冠の纓を巻き鏝を付け左の方赤袍を着し右の方黒袍を着し各南の鳥居の外に於て馬に乗る馬場の未より馬場本に至る先ツ背一番をもむ左右一疋毎に馳走を空走と云ふの後各々ハ馳走遅速を争ひ勝負を決し古ハゆる真手結あり

**文昌** 和漢三雅録軍中端午を以て馬を走らせを踏柳と云

**帷子** 才園会通俗夏月必用の衣九帷子と名づる端午より衣を着るは浅黄色を用ふ七夕ハ朔月白帷子を用ふ近代士庶人の通例あり

**和名抄** 鹿子百合 花律白花紫点あり其花横三向

**和名加** 鹿子百合 開く葉点あるゆゑ鹿子百合

**蓬** 大和本草 葉ハ辛く似て厚く老あり莖つよく水上より秋の末迄一莖一花を

**酢漿草花** 蘇頌圖經 酸漿草嫩

**蚊情釣草** 和漢三才圖會 葉穂もは統根草は異あり

**輕息子鴨の子** 本朝食鑑 車鴨、輕鴨、芦鴨、この三ハ四五月に至るまで

**鹿の子** 紀事 毎年

**六月掛鯛** あり

**嘉定喰、嘉定錢、かつら**

五月の時節南都春日山麋鹿の子漸く成長を

野水田溝に極て或ハ孕み或ハ孕せり

黄白色卵を吐く水上は浮ぶ

古奇よかものこもりの子

鹿の子 毎年

六月掛鯛 あり

嘉定喰、嘉定錢、かつら

五月の時節南都春日山麋鹿の子漸く成長を

野水田溝に極て或ハ孕み或ハ孕せり

黄白色卵を吐く水上は浮ぶ

古奇よかものこもりの子

鹿の子 毎年

六月掛鯛 あり

嘉定喰、嘉定錢、かつら

五月の時節南都春日山麋鹿の子漸く成長を

野水田溝に極て或ハ孕み或ハ孕せり





















て皮厚く深青色を經て白文あり内ハ越瓜に似て煮食はあり  
一のち糟及び糠は藏む硬く脆く羨あり上品なるを一種  
菜瓜は似て小く鶯の卵の如き  
奈良漬製を  
とのあり小瓜と名づく糟は漬て食フ

同上糟漬の法六月土用の中ハ越瓜の青き物を採てちせを  
破り蛤貝を以て瓢子を刮去り船艦の形とし灰を盛るこ  
と一時ハよりみして水湿を去り灰を拭き去り塩を盛り九十  
士舟の糟三十斤を用ゑ瓜を包み藏む各相碑しめを固く  
封む大抵七十  
五日より成る  
納豆造る  
の法より出以酒肴とせ

信家茶を  
夏切茶  
を新壺に盛りて常々茶を賣  
とてこの良賤の家は賤なるを夏切茶と云壺の蓋紙は糊  
て堅くちせを張り風湿を以て壺のうちへ入し茶を用ふる  
とあるときハ小刀を以て壺の蓋合縫の糊紙を截り茶をお  
ちせを壺の口を切と云冬口を以て壺の蓋夏の同文との山  
林清涼の地あり故に夏中用ふる所茶  
先ちせを贈る故にちせを夏切茶といふ  
夏ぶ  
千梅

がせしは誤り輕の生布とを  
雜談抄は髮淋瘡とを暑中  
は幾さる小児の疔瘡あり江戸の俗訛りて夏ぶりと云

夏深く夏の別夏は後夏に限  
夏過る夏を追夏の果何れも  
別々也

五月 蘭湯ふ浴を  
大戴礼五日菡蘭為沐  
浴楚詞浴蘭湯兮沐芳艸

本草蘭ハ乃次蘭の香草之今  
の幻蘭花よりありざるあり

四月 向日明

### 神祭

神社啓蒙向日の神社ハ山城国乙訓郡西岡の辺に  
在名勝志當社の額正一位向日大明神と豎二行よ  
る也道風の筆と云西岡の民家の側は花表あり雍州府志  
一説は日に向ふは六月と云るも八月流命を祭るとあり  
向日大明神より本朝人皇の祖神神武天皇と云はれ是  
る也を考む○当社祭礼の以前社人先岩倉山三重院へ行  
て振舞をあり又祭日必神馬を此滝に引あり是出現の地  
也之出現の地と云西岩倉金剛寺縁起にも云くこゝより  
今も存  
結葉  
金葉集應徳元年四月三条内裏に庭  
を畧す  
御製ありあへては名もあらずありぬ松のこゝろもつと  
せざりては諸木の葉と葉と相交り結がせしむるをいふあり  
秋  
礼月令孟夏月麥秋至註三秋ハ百穀成熟の期也  
秋は於て夏といふも麥は秋の故に秋といふ  
蔡邕月令章句穀ハ其初生を以て春とて  
熟するを秋とて故に孟夏を以て麦秋とす  
麥の秋  
夫木御園生は麦の秋風とよめき  
山あしきとてあつたあり後  
風  
同会天小麦ともは九月種を下し皆四月黄熟也其刈  
はては立麥が百二十日乃至るを旬とす故に秋は云麦也  
百日の中は蔣べり三日の中は苜蓿と云但し小麦ハ刈  
収るとも大麥より遅るを十日をかり麦ハ五穀の貴とす  
○二年草年越草ともは麦の異名あり  
年をくんで種をよむる名つくる也  
同上月麥相厚く硬く小児用て笛を作りちせを吹く  
笛の形はあつた夫木うまあかきさいはあつた  
の日のあつた西行

五月 六日菖蒲  
京師  
屋擔

五月 六日菖蒲

五月 六日菖蒲

五月 六日菖蒲

五月 六日菖蒲







**花** 花黄あり、胡瓜越瓜の類をさす。梅漬る、梅

**干、梅剥** 梅剥ハ皮肉とも剥掛晒し、浮巢の

部、水鳥の巢、**罐** 余雅注、罐一名守瓜、喜瓜の葉を喰ふ

の条に任ま、**うづ蟬** せ、部蟬の、鶯の

**附子** 貞享式、坎式、例の当用あり、今按る、附子の子

あり、附子の子、夏、附子の子、冬、附子の子、

夏、附子の子、冬、附子の子、

**水** 五元集、水うく、水、

**残花** 貞享式、坎式、例の当用あり、今按る、残花の

赤色肥ゆる身、小き首、六月、

**五月懺** かの神飾、

**六月凌霄** 和漢三

花 時珍曰、紫葳一名凌霄、俗名赤艶、あるをいづく、凌霄

宵と云、年久き藤、大い、林のぶ、春始、枝を生、

一枝、枝、尖り、長く、嵩あり、深き色、夏より、秋に至り、

**祭** 中、巳、但、巳、山城国乙訓郡久世の神社、久世の民屋三所

観、八年八月十四日、丙戌、山城国正六位上、

與我、万代、継神、授、從五位下、

**關白賀茂詣** 中、申、公事、根源、初度、

天禄二年九月廿六日、攝政右大臣、謙徳公、

根関の人の賀茂詣の、

祭、

**國祭** 山城国賀茂の祭あり、公事、根源、

欽明天皇の御宇、四月、吉日をえ、

日の祭、公家より、使をえ、

中、の申、日、國、

**草茂** 元帝、纂、要、夏、草、

**草の王** 大和、赤州、

夏、木、

三十三



車百合

和漢三才圖會 桑畧濁く對生して車輪  
横に垂る下野日光山和  
州大峰の産各異をあり

桑實

同上 桑ハ蠶を養ふの地多く其花を  
裁実のらるるあり俗に男桑とい  
ふ其桑の楮ハ初青く白く漸く赤を黒く  
熟し味は甜く其木堅実して黄白の皮

久比奈 按るは大きな鳩のめくもて頭背翅皆蒼黒の斑あり  
淡黄赤を帯眼の上は白き條あり背蒼くして長く頷胸  
の間にうしろ黒白の斑あり尾短く脚長く淡黄なり夜啼て且  
又達声人の舌を敲くが如し蓋水辺に在り晨を告ぐ故水  
雞と名く本草 多く田沢の畔に居る

夏至の後より夜啼て秋後即ちやむ

黒鴨 和漢三才圖會  
黒鴨一名カ

梅雨中の空合をいふ之譬をかきく  
元といひ又小雨ふりあがり折るをせん  
白をえといふ夕ぐさの暮の空の一ふたり  
るを夕ぐさといふ

六月 鞍馬の竹切 廿日

親長卿記 文明三年六月廿日今日鞍馬竹切也夜に入て護  
法の儀あり今に至る今月今日を修む 紀事 紀事  
延鞍馬寺の主とある夏五月護法を修む日中大蛇北の  
峰より来る峯延毘沙門の呪を誦む蛇あつて斬て段く

とある此寺の本願人藤原の任勢人禁濁は奏して彼夫  
五十人を殺し此蛇を静原山に并俗其地を呼んで大虫の  
峯といふ今に至りて毎年六月廿日村民薬師堂にあり  
大竹を傳りて又別は竹二本を堂の中間に傳り横へ法師廿  
人餘白き袴を着し山刀を佩 庭上に出る一本の竹を近に  
稱し一本の竹を丹波と稱し法師各十人左右より竹を同時に  
声を揚 奔走して山刀を以て竹を截るその迅速よるまで  
兩國の豊凶をよぶ速なるゆゑを豊を降るゆゑといふゆゑ  
後より竹を以毘沙門堂の前より来りて又腹をよぶを截る  
ゆゑを竹切といふ是峰延蛇を斬るの遺意あり又夜に入て  
寺僧各毘沙門堂にあり其側は僧達中間一人を置各  
肝膽を凝してまを祈る侍の一人忽ち倒れ臥しを  
して蕪生と是夜鬼を拂ふ法あり僧達ハ寺僧の外下輩ある  
をのをいふ 縁起 松提寺 鑑禎和尚空亀中は居をあらトス  
雌雄の大蛇あり鑑禎持念ス一蛇忽ち死す一蛇は謂て曰  
此山水を施さばと蛇誓ひて去俄に去りて清泉涌出  
今の関仙井是也寺説竹切の事具は蓮花會といふ是中興  
開山峯延和尚法を以て蛇を斬るの遺意ありて峯延の  
遠忌會あり夜の護法の開山鑑禎和尚の  
一蛇を救ひ護法神とよせし遺意と云 雲の峰 社詩  
突兀火雲昇 陶潜詩 夏雲多奇雲 夫木 六月はありぬと  
とを大をいふあやき峯のそよひらちの孔衣笠内大臣

大和木草 葛の花 大和木草 葛の花  
大和木草 葛の花 大和木草 葛の花

海月取 崔禹錫食 海月取 崔禹錫食

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

夏 夏 夏 夏

名水母額ち月の海中に在り故に名づく、云々滑野雜談  
 泥海に生れ故に備前紀前ホより多く、以月取て擲の葉  
 を多く刺し海月の肉を包み塩を、傷寒論集  
 用ひて、只葉を以て淹蒸するあり、霍亂成正珍云夫  
 霍亂の病ハ夏月暑飲食過度の致す所、胃中擾亂上吐  
 下瀉する者是より霍と腫と古字通用、説文云腫  
 ハ肉美也、大氏人の食此為傷り、所因食居多、特  
 腫を舉て一應食物を統る也、凡人其嗜欲多、所皆こ  
 せを亂し、○志藍云、俳諧歳記、先板の法抄、香露  
 散霍亂ホを六月の香も出るといふ、あへて風流も益不  
 々を今、今也をのせをこり、愚按をる、先板の法抄を  
 をせせるハ皆附句去燻の用あらあり、灰俵集息  
 吹ふを霍や  
 亂の針其角や  
 四月山科祭や上巳○社ハ勸  
 修寺の  
 南の境内、往還踏傍の水の辺にあり、祭る所醍醐帝の外祖  
 宮路氏夫婦の元神あり、勸修寺家の祖あり、寛平十年  
 より祭りありて、官幣あり、今絶て只神饌を供する  
 のみ、今土人官路氏の社と八幡の社と合せて本居神とす  
 九月廿七日に祭る、是を勸修寺祭といふ、今の世は山  
 科祭といひ、北山科諸羽明神祭あり、九月九日祭礼あり、  
 神体ハ大己貴太玉の二神、八瀬祭上辰○八王子  
 本朝補翼の神あり、天満宮  
 兩社の祭あり、天満宮の宮ハ愛宕郡矢倉の里にあり、八王子  
 の社ハ天満宮の巽二町ばかりの山腹にあり、修人の菅家少  
 年の時比叡山法性坊の室に入て学文を、往來休息の  
 處、後人社を建、土人祭の日、大竹を切て、杖は五本の扇  
 挑灯を釣り掲て、難し、あつ、持あり、あり、其唱哥、俚語  
 方言を以て、一興あり、矢倉一村凡百軒をかり、父老或は上り

山崎日の使

る人をのりといふ又吾をぞうてけらといふ、  
 三日名勝志八幡宮寺中、積岐云、日の使、四月三日、一郷万代の  
 勤役、山崎より辨備と云、晚際、及て日の使あり、相列り  
 山崎の秘村より、来り、儀式京洛の大臣は、同ト、又冠は紫藤  
 をかけ、舞男の巾子は櫻を挿む、彼馬は騎あり、二度袂を  
 を廻りて、下馬せ、一面は御殿に相對し、再拜して、衣の袖を  
 刷る、神事記日の使ハ八幡宮才一の事神也、治承三年、  
 猶勅使の義あり、同四年兵乱ありて、退轉を、并賣瓦屋  
 関の院勅裁を申下し、在地の神人、あせを、勤む、  
 交野の土民御先の役より、弥陀寺と号す、白杖を捧て、鳥羽木津  
 に出る者、羊頭馬長あり、神巫森人、次男、藏人、司先行、色掌人  
 笛を吹、鼓を打、又細男といふ二の形あり、武内高良の神  
 あり、此祭、今傳るる、○明月記、建仁二年四月二日、山崎  
 の民家、悉く經營、毎年祭あり、道の邊に、橋を造り、播磨大  
 路より八幡を奉り、見え、往昔、昔祭、山崎より八幡の山  
 下まで、大酒は橋を渡さ、今、今の橋本其遺跡あり、此使を勤  
 を日の頭と稱し、其人を日の長者と云、一脚の上首と云、其商と  
 長者衆と云、究め、山崎祭雍州府志山城國  
 離宮八幡の傍に、  
 祭る所大山祇命之延喜式山城國酒解の神社一座、注云亦山  
 崎の神と号、同書山城國と撰津國との境に疫神を祭る  
 と云、此社、山州名跡志、天神八王神の社、大山崎、北の山にあ  
 り、祭る所素盞烏の命の御子八王子、今土人本居神と云、  
 ○俳諧歳時記、今日此使、童使といふ、あり、今式、今日の  
 使の所、記ハ誤也、明月記、云建仁二年四月八日、午刻、水邊瀬  
 殿、奉り、末、刻出脚、の辺の辻祭二社、天王社、酒解社、御前を、  
 其、その中一方、頗る田樂ホの供奉、副ふ、土民ホ、此奉を、  
 夏  
 や  
 三五

古事記に思ふ土人山崎の神と武塔、**矢数** 洛東三十三間堂

蓮華王院といふ所の得長壽院の辺あり、同所の池の中に社若を親社とて、凡此所の矢数毎年四五月永日の方晴天を候してふき、射人堂前居る今日の昏より翌日初暮よりくうて、通す所の矢数他は超えざるを天下に

**山苜花** 和漢三才圖會賣子木今知佐の木といふ處々山中あり高きもの二三丈徑一二尺皮粉青白色老ると浅褐色中心白く其葉梅燦木の葉に似たり長く尖るを才をかり面青く背淡く冬凋み春生す三四月花をひくく碎きてをみ白く單瓣あり野梅の花に似たり葉稍長く垂る大葉を作さば但し毎二三櫛生の實を結ぶ状小連子の如し初め青く後黒く堅くして肉白色滑穉雜談此葉菜類の苜に似たり名くといふ云々新撰

**敷椿** 蘇頌圖經女六帖我ちくく人めせらよあはふら白やうのき山ちふく礼泰山は貞木多しといふ是あり其葉柗骨及冬青に似て冬を凌ぎ冬凋み五月細花を開く青白色九月実あり倭名抄女貞 和名大豆乃木 和漢三才圖會女貞木の葉海石榴に似たり鋸齒あり故に海石榴と名くといふ俗に是を敷椿といふ然るは野椿の敷は咲あせす初夏の頃花あるも然るにふふんといふ言ひの誤りあり

**夏物** 魚築 魚築とをかりしを夏あり上り築を連句よ其季に連る時上下の釣り及む三季に用ふる貞享式にいへり

**五月山田** 廿八日は伊勢山田太神宮の御田植あり今式太神宮の室前まへ神事修

**御田扇** 行の扇あり是を御田扇といふ是を以て田を扇ぐ風情をおと虫を生たる患ありといふ産婦も又この扇を求て相向ふ所の柱まのくを極て産安しとて是虫の障をかきいふ者あり○五月廿八日といふも日定らば下旬は日をもえ

こを是を行ふ當日称宜敷葦御子四稚子をを勤む神田の高倉山といふ俗に天の岩戸といふ所の東に麓豊宮崎あり伴の人の共所に至り御子羅子早苗を植るすといふをを神人祓を修む太神宮の一の倉居まを神楽唄をうたひ笛太鼓を舞ふ長官八乘輿祿宜ハ騎馬御子羅子の雍樹まを高倉山まをまを倉居の所に至る素袍を着る者長そ六尺をかりの大扇をさへげて奉詣の諸人は戴りむ又一説は丸山といふ所の土人いふ女の形とあり伴達漆の帷子を着赤き襪をあげ烏帽子をいふも黒塗の棒をふり廻し扇をあふきまふ内宮外宮ともは同くあはれど

山田の名世は高し其扇を換へ奉詣の諸人は典ふ内宮ハ七本骨外宮ハ六本骨あり稲を履く馬の画駒を釣る人形の画或ハ鶴亀を画きまふもの**薬草摘** あり是を長官宅まで其日の朝興るあり

くの部葉日 **大和撫子** 名の部撫子の条に注ふ **楊梅** 時の条に出 **魚築打** 石を堰木を障て魚

曰揚梅その形揚子の如くも味を梅に似たり故に名く実を結ぶ楮の實に似たり五月熟む紅白あり紅白は勝せり紫は紅に勝る **魚築打** 石を堰木を障て魚頭大しを板細りあり **魚築打** 石を堰木を障て魚

より梁の条 **四月松尾祭** 上ノ百神社啓 蒙松尾

の社ハ山城の国葛野郡にあり玉都西南を去るて二里余祭る所の神大山吹神 廿二社註式市杵島姫也云々公事根

源乱世以来上ノ酉ノ日云々祭式江次第より出たり此祭日吉神更  
の如く葵(あひま)を掛仁明帝承和四年始て祭るといふ(記事)  
神輿七基其内一社毎年白木を以て新造とあをを武御輿と  
いふ祭日神幸畢て後桂川の東に捨て翌日児童再び此神  
輿を昇せりて後あをを碎き破るる木片を取て則ち  
柵むらや疫をまらふの呪ありといふ武御輿民間に子ホレ  
れ官と称すいふあるは今日再び遊行を猶ほばせざるが如  
く神輿七基八月読の社、櫛谷の社、三の宮ハ宗像の社、衣手  
の社、大天神御旅所ハ、**當宗祭** 上ノ酉○河内国志紀郡當  
七条朱雀の西に在 宗の社ハ仁和四年四  
月始て勸請あり公事根源午の日使より社本當宗ハ程近  
き故に一人の使而社の祭のしる下向を宇多御門の御外  
祖父ハ當宗氏あるより仁和五年四月十四日祭りをそと  
め行も、**姓氏録**當宗忌寸ハ後漢の獻帝より出四世の孫  
山陽公の後 **松前渡** 南部津輕等の商人産物交易の  
あり云々 **松前渡** 為に蝦夷松前へ渡るをいふ北海  
凡ソ冬春の間ハ寒氣強く波濤穩りて故に四月をいふめ  
出岸し九月を限りて帰國を依ていふを夏といふ上を  
秋と **天蓼** 和漢三才圖會藤天蓼按をん山の中より  
今人家に之を植其蔓蒼黒く根及び  
櫻桃の葉に似て皺あり三四月小白花を開く其梅花に似  
て小し実を結ぶ但し雌雄あり人との嫩葉を取て酸味  
は合和を食ふ **祭** かの部神祭 **五月松**  
猫常は喜びて食ふ **祭** の所は注也

**本祭**

朔日 淡海志江州大津松本村に神社あり祭  
所の神平野大明神也人皇十七代仁徳天  
皇の廟あり難波の平野を移し奉ると云々本宮ハ往昔  
六七丁南の山狐谷にありといふ慶長中今の所へ移す神

輿一基あり今の傍は精  
大明神を並する **豉蟲** 黒き虫豆をどりあり水  
上は浮旋りを止すは菟茶もそカイモチカキ江東の俗に  
ママイリといふ按るは是獨樂茶の訛言あり脊純黒  
く腹ハ淡赤く閑東も水スマシ又サトメといふ是あり然  
るを得て水をきりハ水馬と思へる葦多し去凡句合ふ水馬  
の題も藻の花を休之所也水をきり **菰苧** 中は生む  
とまゝあり是伴の取ちる云々 **菰苧** 中は生む  
葉蒲葦の葦の如く刈て馬に秣甚だ肥春の末白芽を生  
む筍の如く即菰菜也八月花を開く葦の如く子を結ぶ  
粟も合して野 **菰植** 廣韻大豆菰あり小豆ハ荅之和  
と食ふ **菰植** 漢三才圖會大豆大低夏至の十日  
以前種を下す諺は夏至の鳥脚といふ既に生出る **鳥脚**  
鳥脚の如く七九月花をひき九月莢を結ひ十月花を収む  
**六月** **蠓** 和漢三才圖會蠓一名醯雞列子朽  
壤の上は生ス雨は因て出ル陽を觀て死を雨  
雅注は飛る蠓はくときハ風を扇つときハ雨をいふ  
ハ風吹んとまるとときハ旋り飛る蠓はくかめハ一ハ上ハ一ハ下  
を扇つてかきハ雨ある云々形蠓は似てわく **甜瓜** 時珍  
翅身皆灰色背窄其大さ一分をこき **甜瓜** 時珍  
瓜の味諸瓜より甜し故に獨り甘甜の稱を得たり○王禎曰  
二三月種を下し五六月花ひき六七月瓜熟也○美濃國本  
巢郡真桑村に甜瓜の種 **花** 時珍曰一名象穀一名米囊一名御米其実の形器  
子の如く其米粟の如く乃ち穀に象を供御とまへし  
故に諸名あり秋種冬生嫩苗蔬にありて食ふ甚佳葉  
白莖の如く三四月莖を抽て青莖を結ぶ花はくときハ

**六月**

**四月**

夏 まけ

苞脫を花四瓣大さ仰蓋の如く、嬰ハ花中よりあり、鬚葉菜を  
むを最花開る三日、即ち謝る、嬰莖の頭よりあり、長さ一二  
寸大さ馬兜鈴の如く、上は蓋あり、下は蒂あり、宛然として  
酒罌の如く、中は白米あり、極めて細く、其花姿態常ニ  
白き者、紅の者、粉紅の者、杏黄の者、半紅の者、  
半白の者、故に廉春といひ、賽牡丹といひ、又錦被花といひ、  
和漢三才圖會、蕙蘭、茶蕙、黃蕙、茶蕙、蘭、莖を立て、葉を生え、  
秋蘭は似て潤く、薄く、色淡青よりて縦理あり、三月莖の端  
は白花をひく、香あり、又黄紫の二種あり、云々、按ずると和  
俗蕙と稱するもの白及の類も、葉大小あり、山中は生るもの、白  
花黄花あり、又盆に植て愛するもの、黄蕙、星蕙あり、此根  
菱の如く、稜あり、蜀本叶は白及の属も、白及三月一莖を  
抽出る紫花を開く、冬凋む、根菱に似て三角あり、白色角  
頭は芽を生え、云々、和俗のまゝ蘭と稱するもの、根菱に似る  
ものあり、黄蕙、星蕙ハ  
蜀本草の説のまゝ、

**無三夏物 夏籠夏**

行 安居 佛者四月十六日より、七月十六日に至る九旬の間禁  
足安居、既ちあせを信夏といひ、既ち終る解夏と  
り、又七月十六日より十月十六日に至るを自恣といひ、釈氏要覽  
南山抄は云、偏は夏月約りよまると、ハハ、無事遊行ハ出世の業  
を修むるを妨ぐ、二ハ、物の命を損むるを忌むる違くて、深  
く、三ハ、所為既ち非、故に世の謗を招く、云々、五雜俎、四月十  
五日より、天下の僧尼禪刹は就て格挂を、あせを信夏といひ、  
又あせを信制といひ、蓋し長鞭の辰は方外は出で、恐  
らくハ草木虫蟻を傷らん、故に九日安居禁足あり、七月  
十五日に至る始て盡く散り去、あせを解夏といひ、西域  
記は十六日あせを是とせ、結夏十六日を以て始とせ、  
印度の法あり、中国八月の晦を以て一月とせ、天竺八月の

満るを以て一月とせ、則中国の十六日乃チ印度の朔日あり、  
○安居 釈氏要覽南山抄云、形心静擾を安とせ、  
期を任する、  
夏断、夏書、夏經、夏花、  
夏行、安居也、安居ハ出家修行の暇を得る私住と故に安居の間他の  
化益を専らに勤る、三界萬靈は回向等する、一夏九旬ハ八十  
日を旬とし、九十日あるがゆゑ九旬といふ、在家の志ある輩ハ夏  
を修し、九旬の間飲酒魚肉を断、あせを夏断といひ、經文を讀  
誦するを夏經といひ、あせを書寫するを夏書といひ、  
先祖の聖靈有縁無縁の菩提の者よまるとあり、云々、

**五月 削懸の甲**

是日祇園の削掛を標格として、甲のかさとして  
是、是邪氣を祓ふ神祀ありと云々、  
かの部飾甲の条を見合せ、  
競渡 兎津 月令廣  
傳ニ曰、競渡ハ越王句踐は起る、歲時記五月五日の競渡ハ屈原  
を極、もととせざるを以て也、後世遂に戲となす、荆楚歲時記屈  
原の日を以て汨羅に死す人舟を以てあせを極ふ、今の競渡  
ハあせ其遺俗也、南方競渡の如く、其舟を治め、輕利あら  
む、これを飛舟といふ、又水車水馬といふ、州將、父老、士人悉く水  
に臨み、あせを見る、蓋越人舟を以て車とし、楫を以て馬と  
せ、故に水車、水馬の名あり、和漢三才圖會、唐人未だ長崎ニ寓  
居して、此日逢ときハ、數艘の小舟は乘、旗幟を立て、先を争  
ふ、排龍々と喚き、いひ速なるを以て勝、  
是競渡あり、蓋屈原の若し龍を逐ふの意、  
泉美美泉

**六月 獸狩**

漢史五月五日、泉の羹を作す、百官は賜ふ、其惡鳥の故、  
五月五日、吾を食ふ、古、泉の羹、泉の羹を重む、蓋其  
族類を滅、  
獸狩 ねの部、獸狩  
の条よ、出、  
六月 解齋御

**六月 解齋御**

六月 解齋御





蚊母鳥を呼ぶはくちりふ今聞よ  
海蘿干 和漢三才圖會 藤角

都々都々ともくちりふあり、  
菜 和名豆 本草は東南の海中石厓の間は三四寸鐵條の如く藤角の状の如く黄白色土人彩曝し貨海錯と水を以て洗ひ醋は排ませば脹起しを新しきりけり如く味極く滑りよ美あり若久しく浸すととき化して膠の状の如く女人以て髪を梳き粘ありて  
**五月 息車** けの部 魏倭の各よ出 **粉團**

**射** 天竺遺事 唐の宮中端午おとよ粉角黍を以りて金盤中は釘を鐵妙をこへし乃チ小角弓を以て是を射る粉團はありりけり食ふてを得蓋粉黍滑膩

りて射たり、都中盛は此戯をよそ、**歳時雜書**端午は水團を造る又白團と名く或は五色の人獸花果の状を雜ふ最精しきものハ滴粉團と名く或ハ麝香を加ふ又乾露水を入る者  
**藤の木林祭** 五日 神社啓蒙 山城の國紀伊郡深州あり 山の南あり祭る所舎人親王○延喜式は載る所の真幡寸の神社二座是あり別雷神旗毒神後三所の皇子を合せ祭る三所の皇子ハ早良親王伊豫親王井上親王又祭る所三座舎人親王早良親王伊豫親王是日神輿三基遊行社家藤野井氏甲冑を着し馬に乗る供奉を歸路おのく稻荷の社樓門の西並二層の杜の馬場は杖を走馬と祈願ある所の人あせむあせむ又あつ甲冑を着し馬に乗て馳駈するも前と同じ一祝は夏の杜ハ早良親王之故弓矢神と稱す今日供奉の人甲冑を着するも是蒙古征伐早良親王歸陣の振乙供奉甲冑を着する也此神事よ始  
**富士垢離** 六月二日夏至富

福を索む行人ともりもる處の依符を願主よさぐ又祈願の人とのら行人は交りて垢離を修す首長を先達と稱し其念をる處を富  
**藤撫子** 子の部 撫子の茶よ出  
**六月 富士詣**  
**紀事** 六月朔日より廿日に至りて諸國の民人富士山攀登る九富士山は登り四道あり駿遠豆甲是あり山は登るも然と方角よりその便は隨ふ所の麓の領主多く人力の及ぶ所ハ坂路を修せむ四道の中と行人止宿の家ありてを坊といふ山伏先達あり奉詣の人あせむあせむ登山を日午坊を出て夜の夜明るまで山上に至る凡行程九里山腹三四の間大木森蔚ありらより上樹木あり登るは堪む故に半夜に入て登る土人坂路中間の岩窟は小屋を構へあせむを藤小屋といふ少く風烈しき時ハあせむを此室に入屋主雪水を以て茶を煮てあせむを煮か山土所よ其地冥社あり絶頂は池あり周二里余池の中常は烟ありあせむ塩硝硫黄の氣ある故あり登るをのち池をめぐり若風雨は逢ふときハ巡るてあたまたま攀躋を得るを富士山上といふ今略して山上といふ又或ハ禪定といふ後世菩提を祈るを以てあせむの人を行人或ハ道者といふたの登る處の坂路の外別は沙石の道あり歸るときハあせむより下り行人脚底は草鞋を縦横ありて穿かくの如くせむを足のかき堪むあせむを沙石に乗し下るを八九里の間二時をかりあせむを林に至る近世山の腰を巡る者ありあせむを横行道といふ又横出山上と稱す其此行程攀躋は比まれ道を通る倍も且險阻堪難いふべしあせむを苦行といふ九山上七月以後既し雪ありて登るての故に諸方より来るあせむは六月を以て限とす一説は富士山人皇七代孝靈天皇五年淡海國の地折る湖港ふ時は富士山出現を故に近江の國人富士を以て吾國のおととこれ

夏  
四十

よきりて、近江の人垢離あはれ及び他邦より来るものも、近江の土砂を携もりて山上に登りて、近江の人よ准じて平安を得るといふ縁記縁記延暦三十四年託と曰い我を淺間大神と号なせと、平城天皇大銅元年、社を立て、是を祭まつる、本地大日姫来き、神社啓蒙淺間の社、駿河國不盡郡あり、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**腐草為**腐草為なる、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**風蘭**風蘭、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**舟遊**舟遊、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**振舞**振舞、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**水**水、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**四月 更衣**四月 更衣、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**氷を供**氷を供、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**江州八幡祭**江州八幡祭、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**五香水**五香水、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**高野花供**高野花供、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**五香水**五香水、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**高野花供**高野花供、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い

**高野花供**高野花供、一宮記富士権現と号、大山祇女、木花開耶姫ありと云い



東南の風あせふ  
是を黄雀風といふ  
**極暑** 梁元帝詩云季夏  
煩暑流金燦石

**薺散** 時珍曰香薺ハ夏月解表の薬冬月の麻黄を  
用ふが如し氣虚の者尤多く服さばかき人  
香薺の元氣を傷まざる有病無病は抱らざる薬用  
薬に代て謂らざる服する暑を避くといふ  
五元集香

薺散大がねが  
香薺 宗奭曰圃と作を香薺を  
夏月蔬菜と云ふ者ハ茵陳  
に雲の峰其角

似る花葉を以て  
連毛穂をよめた  
**心太** 暑月蔬菜と云ふ者ハ茵陳  
に雲の峰其角

**四月** 爲茶の異名あり御今  
原性善が万安方本を  
爲茶の異名あり御今

**びま薬えびま草** 原性善が万安方本を  
爲茶の異名あり御今

えびま草と名付る云々  
和名抄芍薬 須久須利  
**烏帽子魚** 相

の海辺鯉先寄らんとせしと云ふ一物流せ来り大さ二尺ふゆ  
形烏帽子に似て左右の紐の如き物ありその色瑠璃紺  
光澤あり毛を解りては漁者此の物の漂流するを期  
して海上に櫓を構へ鯉の寄るを見れば鯉見るといふ西

三日もさき果して大は鯉を獲る  
と云ふ烏帽子魚と名付る云々  
**蚕簿** 和漢三才圖会  
比良槌ハ蚕簿を架きて柱あり蚕簿ハ無名  
苑ニ云ふ蚕を養へ器其上施し繭を作らむ者  
各三

**五月 豌豆** 和漢三才圖会花辨蛾の如し形  
外白く内は淡紫あり中心黒色其  
實褐色六月

**六月 江戸浅間祭** 朔日江戸浅  
間社  
浅草砂利場の後あり毛を浅草の富士と云ふ又駒込にも浅  
間の社あり又本所六ツ目及高田馬場又鉄炮洲おも同社

あり祭の所がせも駿河のあつ今日麥葉よく龍蛇を  
作り是を篠まつと云ふ當くは此多し春訪の人毛を買ふ  
る土産

**江戸天王祭** 相傳ふ元禄のちりめ大は流疫  
しと云ふ  
明神の社地は勸請あり處の祇園三社の神輿を由りて街は江戸  
一奉まあせり後毎年祇園会を修む先大傳馬町所  
神輿一基五日出典八日還輿小船町所神輿一基十日出典  
十二日還輿南傳馬町所神輿一基七日出典十四日還輿あり  
此等も神輿還幸の時りり町の町を渡御社人衆東馬にて  
供奉鋒三木氏子是は隨々神輿渡御の町一日廢務之成  
八門は竹を植る家あり毛竹の老あへり其外浅草御花  
千住品川四番おも此祭あり中も品川の神輿ハ海江を渡御  
も天王祭といふ牛頭天王の祭といふ義之祇  
園会といふも天王祭といふ江戸の方意

**江戸山王祭** 別當勸理院僧正神主樹下米女にその外社家数多  
る乃官より神領六百石を附せり當社ありハ八間郡川  
越仙波といふ所ありその地仙臺仙人の住せり古伝あり  
慈覚大師草創ありて星野山無量寺と号し天台の灵地  
とて山王を勸請ありての後海僧兵中興し三十余院を  
らべり人皇百三代後花園院長祿三年太田道灌江戸を築く  
の後文明年中仙波星野山の山王を勸請して江戸の城獲る  
る此地今の紅葉山ありといふ  
御當家御在城と云ふ  
ありりて城西の貝塚は移りて明暦回祿の後ふか溜池  
の上よりつぎは是今の社地あり江戸第一の大社神殿巍々として  
石の鳥居五十三段の石階松栢枝をたつて松と上久り祭礼六月十  
五日官祭あり隔年に行ふ凡祭祀は預りの町南ハ芝を限り西花  
町飯田町を限り東ハ傳馬町濱町邊を限り北ハ内神田を限りといふ

神輿三基祭の番組四十番各花山鉾一本棟物末を  
出と神輿は御の町々宵宮より機敷を構へ幕を張り檀  
を鋪つて後軒は多くの提灯を釣る十五日の天明先神は  
太鼓是は添ふ其次猿の造り物ある引山その次諫鼓は鶏の引  
山は其外の番組は例年の定めあり此祭は概町より朝  
鮮人來朝の形は出立ち布を造り大なる象の棟物を出  
す近年引山の外 神幸の道本山を出る水田馬場より御堀  
端を歴て概町御門に入 上覧所を渡り竹橋より神田  
橋鎌倉河岸を過今橋より本町寺町目へ出石町三町  
目小傳馬町大傳馬町旅籠町へ渡り今鋒大吹貫熾屋臺引  
山甲冑の法師あり氏子は預る處の諸侯も又警固の武士  
をいり長柄鑓を立つて後郡行を茅場町薬師堂  
山王別當の境内より神饌を献し畢り八丁  
堀日本橋筋を中橋へうつり夫より本山へ還幸 炎天  
の天を

**て四月**

**手安天神祭**

午の日

○江州野洲郡江辺の庄はあり水原村北村三ヶ村の氏神  
鎮座年月詳多し明和年中より七百余年ありといふ  
又永保年中より四百年以前延久五年十一月十六日水  
原越前守再建その後應永廿六年六月永原越前守雅  
行修補又明應七年四月十四日同氏重秀改め造り出の  
重秀も越前守に任じ廿八万余領又京極佐木の日流も  
て水原に任入依て本居神に在り四月午の日祭礼神輿三基  
法舟あり例祭五月十日より十三日あり連句千句與行あり  
参頭ハ時の地頭の句を之例とし此所北村季吟出生の地  
又平清盛の妻故上も此地に出生故に平家の奉行判物の  
大絵図氏子三ヶ村に傳來せしといふ 繡球花  
別當実光坊の説とを祭式不詳 和漢  
三才

國會粉團木の高さ五七尺葉は箱根楊楹に似て圓く皺  
文あり四月花をいり初は淡青色後正白くうき花楸を  
團と二三寸一種小粉團といふあり木の高さ四五尺葉楸く長し  
楸葉の葉に似て粉團に似てやく白く大さ寸半ありを  
ぎ **五月 天中節** 提要抄五月五日午の **天師**  
を畫 **天南星** 蕪頌國會天南星  
三月苗を生む荷梗に似て其莖高一尺以來葉葎葎の  
如く兩歧相抱く五月花を開く蛇頭は他より黄色七月  
実を結ぶ穂をよき石榴の子に似たり紅色○時珍曰一  
名虎掌葉の形あり似たり因り南星と根田  
白く形老人星の如くあり故に南星と  
名く和名抄虎掌 和名抄保  
苗金鐵線花按するは苗宿根より生一極三葉微若  
の葉に似て小葉細く韌甚勁故に鐵線といふ俗稱之  
蔓無く其葉架は倚て繁行四月花を開く葎の下は六葉  
あつて莖を抱く亦一異あり其花白色六の瓣平に開く葉四  
く紫色最艶美其葉徒を天蠶糸を絞るをよきと  
似たり其り子あり○千葉鉄線は外六の瓣より白色帯り  
如く内の瓣も白色千葉短く細く随いて  
青き葉あり外の瓣既は落せ六内の葉

**天満御稔** 廿五日○當社の根津大坂西成郡天満に  
群談社家説は曰天満宮の權輿八人皇六十二代村上天皇の  
御宇天曆年中この地は天満山とよび於て一夜は松茂生  
その梢は月光赫たる人志を怪しく帝都に告ぐ奏聞を  
遂ぐ帝即日勅使を下しその時神託ありて云羅波

**六月**

の梅をよみし葉まありきよき未る人驚き覺るその由を  
奏し依て管冥を地鎮し云々○例祭六月廿五日邀物  
車樂水陸ともは後里詠りて神輿夷の御旅所  
は出往還川舟より数万の提灯群集遊船又多し  
天

**祝節** 四年詔六月六日を天祝の節とす  
四年詔六月六日を天祝の節とす  
あ  
四月

**裕** 文選秋與賦御裕衣 裕衣無絮 ○凡四月朔日を更衣  
裕衣無絮 ○凡四月朔日を更衣  
裕衣無絮 ○凡四月朔日を更衣

**網鳥** 網をとりて取る明年の夏鳴せんと云心云  
網をとりて取る明年の夏鳴せんと云心云  
網をとりて取る明年の夏鳴せんと云心云

**青簾** 青葉の竿 藻塩草 青葉の竿とて青簾の竿とて四月朔  
青葉の竿 藻塩草 青葉の竿とて青簾の竿とて四月朔  
青葉の竿 藻塩草 青葉の竿とて青簾の竿とて四月朔

**翡翠の竿** 日新しき竿をりんと云一説は加茂の  
翡翠の竿 日新しき竿をりんと云一説は加茂の  
翡翠の竿 日新しき竿をりんと云一説は加茂の

**葵** 四月朔日翠竿よりけらる故青葉の竿といふ云一  
葵 四月朔日翠竿よりけらる故青葉の竿といふ云一  
葵 四月朔日翠竿よりけらる故青葉の竿といふ云一

**扇を賜扇の拜** 此部孟夏旬と  
扇を賜扇の拜 此部孟夏旬と  
扇を賜扇の拜 此部孟夏旬と

**葵祭葵蔓** かの部加茂  
葵祭葵蔓 かの部加茂  
葵祭葵蔓 かの部加茂

**蛙** 寸半は過る雨蛙といふ最モ小あり色  
蛙 寸半は過る雨蛙といふ最モ小あり色  
蛙 寸半は過る雨蛙といふ最モ小あり色

**青ざり** 青く木の枝ふをむ下る是枝蛙あり  
青ざり 青く木の枝ふをむ下る是枝蛙あり  
青ざり 青く木の枝ふをむ下る是枝蛙あり

**枕草紙** 五月五日のこをいへる条は青ざりといふも  
枕草紙 五月五日のこをいへる条は青ざりといふも  
枕草紙 五月五日のこをいへる条は青ざりといふも

**蜀** 敷ておせおせこーよさあかんぱいそやあんこや  
蜀 敷ておせおせこーよさあかんぱいそやあんこや  
蜀 敷ておせおせこーよさあかんぱいそやあんこや

**葵** 草葵タチ葵此二名亦蜀葵をいふ○時珍曰春の  
葵 草葵タチ葵此二名亦蜀葵をいふ○時珍曰春の  
葵 草葵タチ葵此二名亦蜀葵をいふ○時珍曰春の

**夏物** 扇 五雜俎大明以前指扇あり多  
夏物 扇 五雜俎大明以前指扇あり多  
夏物 扇 五雜俎大明以前指扇あり多

**汗衫** 釈名 衫の袖の端ありて云  
汗衫 釈名 衫の袖の端ありて云  
汗衫 釈名 衫の袖の端ありて云

**暑** 山堂考索陽事を用ゆる時ハ則日  
暑 山堂考索陽事を用ゆる時ハ則日  
暑 山堂考索陽事を用ゆる時ハ則日

**洗鱸** 和俗夏月其肉を魚野に作り洗淨め  
洗鱸 和俗夏月其肉を魚野に作り洗淨め  
洗鱸 和俗夏月其肉を魚野に作り洗淨め

**青鷺** 和漢三才圖會蒼鷺和名美止言あつら  
青鷺 和漢三才圖會蒼鷺和名美止言あつら  
青鷺 和漢三才圖會蒼鷺和名美止言あつら

**安居** けの部夏籠  
安居 けの部夏籠  
安居 けの部夏籠

**青山椒** 和漢三才圖會本草  
青山椒 和漢三才圖會本草  
青山椒 和漢三才圖會本草

**蜀椒** 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く

**蜀椒** 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く

**蜀椒** 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く

**蜀椒** 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く

**蜀椒** 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く

**蜀椒** 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く

**蜀椒** 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く  
蜀椒 蜀椒ハ釘の如き刺あり葉硬く







又空鱒島 六月 芦の神輿 部の津島祭

鱒あり味芳る 神社尾張国年魚市郡江崎松姑島千

執田祭 竈の郷より正殿五座第一天照太神才二素

命 皇武才五建稲種 皇地 才五建稲種

草薙の空劔あり又熱田七社より大宮八劔宮高藏宮大

福田宮日割宮氷上宮源太夫宮是より此外振社末社百

余座あり當社八人皇十二代景行天皇の御宇鎮座あり其後

天智の御時故有る皇都遷移一奉り十九年を經て天

武天皇朱鳥元年より當國遷坐あり其砌

ハ例祭勅使下向有る官幣を奉らせりあり抑當社の

神事年中數度ありまづ正月十日辰刻踏哥の神事大福

田の社より始て政所大宮八劔又大福田より終る此社倉稻魂

を祀る故に五穀豊登を祈る神事あり舞人十二人高巾子一

人笛一人陪二人各櫻山吹を榊頭とて同十四日歩射の式十

五日ハ歩射の式十五日ハ歩射の式廿二日ハ兩宮の歩射會二月

初巳午未の日祈年祭○同月初未の日午刻御田神社の供

御此日鳥喰の神支あり俗に鳥祭といは是ハ神支いふこと

ありまづ前ハ大宮殿の前より祝座の長外より一平餅を

りて鳥を呼ぶあり此餅を鳥のくちまをさるるつらハ神事をさ

りてまづ五月五日ハ神輿鎮皇樓門上へ神幸 古吳お○六

月九日山鉾祭あり執田ハヶ村よりあせを行ふ 山一輛○同

月晦日夏越の夜あり鈴の社前の川岸におしてあせを修ス又

○七月七日ハ大宮の大掃除除土月初寅卯辰の日新嘗祭土月

廿九日兩宮外院煤拂はホあり此外諸社の供御ハ月々ね互

らせ有る今要

を括て略記ス

愛宕の千日詣 廿四日神社啓蒙

丹波国桑田郡水

雄の北より祭る神二座伊井並尊火産靈神云々神祇拾

遺愛宕権現端の御前軻遇樞命與の御前伊舎那美

尊紀事六月廿四日愛宕詣是平日の千度は當りていふ

俗に千日を寺僧六坊よりあせの日参詣の人は酒食

を餐せしむる坊著といふ大札を買つて歸路檜の枝を求

め樽を付て身を肩よりて歸る檜の枝ハ竈の上より挿け

くはしむるまづハ其意大災を免るといふ九六坊国毎

に檀越あり貴賤を擇ばず毎年札を贈り執田を贈るあ

の使を勤るもの中衆といふこの山峯岨の西よりあり延喜

式に載る所丹波の桑田郡は属今ハ山城の国より本殿

祭るとして愛宕権現無跡本地勝軍地藏菩薩是則

慶俊法師再考勸法とて所あり当社よりハ城北の鷹が

峯よりあり先仁天皇元

年今の地よりつむ

荒和後 板の茶こま

麻

の葉流 年中行夏夏引の麻の大ぬきとり

蔵卿 麻の葉を切て幣とてさるゆゑよとてさる川は

流とてあり板草といふ麻のありあり麻の葉とてさるを

さる故

暑日 字彙釈文暑ハ貴を執りて物を煮

み名く

暑とてさるハ

青嵐 夏木立の梢の緑を吹あせを

三夏を兼ね

一夏の雲あり青きたる天氣より東風のくちまを

を青東風といふ無類の天氣を青嵐といふト云

赤

草 廉文曰赤草一名山酸醬高七寸五分一莖一葉

素吾の如くゆりて薄く小く夏日其莖葉真紅とて

其苗山沢あり故に酸漿と名く立花

を好め人夏日あせを煮て紅飯と稱す

青田 杜詩六

月青稻



大津の四の宮より立又祭の日神幸の時大津より大宮の拜殿に込入奉る○申の日江州東坂本の山王祭の午の刻過て田楽法師獅子舞比叡辻の人並三衆徒前駈りて神輿を迎へ七社の神輿山を下る時前後をあそびを競ひまゝ舟よりせし取山門の僧徒棧敷を構へ翠傘をよれ是をこゝろを横棧鋪といふ田楽法師の前は於て藝をよみよりの日京の山王町より供物を日吉の社に献前日天名の当座主の御室に至るにせを加持し翌日東坂本に至り供吏又江州膳所の地人御供を献る祭の日傳船二艘湖上は浮ぬ音楽を奏し一々の供物を献備是を御供船といふ舟の船は乗るもの多く猿皮を着て猿の假面を被り猿の元来日吉の使令に云々その中六社の神輿八飯りは供するはゆりて後湖水に撤つ大宮の神供ハ神輿の前二置云々その後神輿船を陸地は寄世神馬相むり得る輿中の神騎と申すを本社に入るといふ七社の空輿ハ坂本の地人も舟を昇りて神輿屋へ入ると今日山門に属する所の供人甚く猛威をふるふ神幸を警固を俗諺に山王祭は礙るそのあそびの語は今日日吉の社にこれを人害するよ及ぶの語あり祭りの前夜いふ八王子の神輿を祭らば急よ山坂を下りて七社の神輿各本社七ヶ所の拜殿に居り抑山王祭ハ七ヶ年詣てもいふ盡く見つゝいふとといふ古老傳へたり元二月中の日の八王子三宮の両神輿を八王子の山上拜殿に昇るを四月末の日は至る二社を神輿に迂奉るを午の神事といふ八王子拜殿ハ元来山崖に造り出りて階下遙は低し神輿半ハ拜殿にあり半ハ拜殿の欄干を越て外に出り神輿の先の方の棒は柱をこゝ相固を待てる柱を抜くと申す神輿に上りて下りて神輿に昇る數十人並居りて中より請取直ち山坂を下りて誠は生

死をちの一時に究むる八瀬の土人預り後まゝ所ありあそびを神輿に落し下り降りて西社を二の宮に拜殿に安置し二の宮の神輿を拜殿に迂奉るは近年末の日の晩とあり十禪師の神輿も又同末の日の二の宮十禪師四社の神輿を大政所より迂奉る同時警固の式あり大宮聖真子容人の宮ハ大宮の拜殿より迂奉るは同長け公人各自素備紫の刺ぬき五條袈裟を以頭をつん太刀を佩る余數十輩甲冑を着し鎗長刀を持るとの所を警固し神前ハ武器を立つらねて終夜警固の執しをよめて各下山を以日京祇園の社より御供を捧りて酉の刻献備とあそびを末の御供より暮れ及る宵宮落しといふてあり大政所四社の神輿を石垣の際へちし石垣の下より柱をこゝ神輿の先の方の棒端を持せ置ると申す又合圖を待てる四社一回は落さんと設けおくる神吏の役人との所々来集りて時刻に至ると獅子舞大政所は来ると二の社三の宮と次第に舞て退く次は田楽法師袈裟束の管笠を被り藝を施し神輿を拜まこの時公人頭取狂言さあきてあめのう仕せしり田楽ををめを立烏帽子を着るといふ舞ふこの舞の扇を奉るを相固と申すを落す四社の神輿昇中よりけし先をあらうして走り収納所の前鼠の宮より前後より相揃ひ是より次方の如く神輿を並へ大宮の拜殿へ迂幸七社合せ奉るは當日申の日山門の大衆棧敷入の義あり公人甲冑を衆徒を警固棧敷の前より獅子舞田楽あり是ハ宵宮は勅使御参向當日より御滞留勅使への餐應の遺意といふ人皇七十一代後三條院延久四年四月廿三日始て祭の官幣を立ちよりのより廿二社注式は出或ハ六十四代圓融院貞元二年四月廿六日始て上卿弁外記史諸司を遣はるといふ○凡神馬の催し二番の鐘は應

トて、奉詣の輩石の鳥居へ来て、集り三塔の公人人数をあ  
らため末の刻をかりし四の宮より柳を渡り、磯成束帯演  
成女官、唐装束を各馬上七度半の使至り、柳をほもとて、  
も長けり。社家春日祭よりあり、社家の柏掌を待て、大宮  
八畧を。神輿各先をゆらして、神輿各先をゆらして、  
前の麻を動かして、合図して、神輿各先をゆらして、  
出せ、前後の隊員石の鳥居まであり、神輿を船に乘  
せ奉り、又先後をゆらして、この神輿船八湖辺七浦より、  
年あををゆらして、是より辛味社の社、神供の義あり、七社神  
輿の駕、丁、創年、潔齋、精進して、あををゆらして、今日、  
の手柄を褒美して、祿を賜ふて、あををゆらして、谷々、  
を出せ、日次紀事より、七社唐崎より、神馬より、陸地還幸と  
り、誤せり、日吉鎮座記祭儀より、卯月の祭礼ハ、琴の御館  
大榎木を以て、神幸の祝詞を奉り、唐崎より、先盟の如く、  
恒世り齋粟の御供料を奉り、神輿を出し、奉り、あをを  
武天皇延暦十年と云く、又御舟祭始りて、延元年中、供水  
以後の例、七社の神輿へ御供を献る、各七膳、献供  
の式畢り、神輿昇り、輩ハ唐崎へ上り、陸地を本社へ歸り、  
西ハ高野、矢脊、修学寺、佛格寺、田中山中の人、東ハ大津志賀  
河野、坂本、苗鹿雄、琴仰木、乳母、真野、おの土人、也、神輿舟  
ハ、差宮の濱へ着岸、是より上り、濱といふ所の土人、神輿を昇  
き、炬火、挑灯り、本社へ還御あり、翌酉の日、廊の神事とい  
ふ者、大坂より来り、神樂を奏し、終りて、後神輿を納り、  
ふ

**神取**

の条は注云、  
か、部神祭

**三枝祭**

吉日撰むり、  
拾芥抄より、

○大和国添上郡率川の阿波神社の祭あり、或説は率川と  
三枝を別社あり、率川社の南は三枝御子の社あり、諸神  
記より、社ハ右大臣是公の建立あり、あををゆらして、南家の  
苗裔あり、祭を行ふ、又一説は三枝の花を折り、酒樽より

故は三枝の祭と云、頭照の説は、三枝ハ、  
ふき、あををゆらして、未廣々を、祝より、  
立と申口傳あせど、令と云、書ハ、淡海公の撰り、  
年中は奏覽せら、是公の大臣ハ、淡海公の曾孫あり、  
再興り、  
愛宕権現の祭あり、滑智雜談例祭神輿三基清涼寺は  
あり、祭日の送迎、地より、寺ハ山の下あり、  
神地ハ、属也、故ハ清涼寺の櫻川ハ、額ハ、  
あををゆらして、この日、一基の神輿ハ、冠ら、  
秋金鳳下もを期し、神幸を催し、一基ハ、野山大明神  
と申て、野宮より、遷幸と云、  
土人、嫁を、  
三才園会、清明の後花を、  
生ハ、  
甘美、  
俗ハ、  
の条

**嵯峨祭**

中の交、  
丹波国桑田郡  
水雄の北自雲寺

五月の鏡  
異聞集唐の天室中、楊州より、水心鏡  
を、  
於て、  
則、  
を、  
高、  
月、  
を、  
水、

**五月さ月玉**

薬玉

**櫻の實**

和漢

夏  
左近の真手番



を生む羽化して小蠅とあり身黒く羽黄色大一分は過ぎ  
去眼鏡を以てを視るは蠅と異ありてとあり然るは蠅  
の子はありて一類二種 五月間 李沈愁霖歌云  
卵生化生異ありと云 葉破苔異未休  
滴賦光透長庭沙色恨無長銀一十似割斷頑雲看晴  
碧藏玉 晴間も空より月とぬ月とい  
ひしりめ

**六月** 西園寺殿妙音講 十六日  
紀事

六月十六日十七日西園寺家妙音講を修せらる今日種々の珍果  
を家の妙音天へ供ま堂上並二樂人相集りて管絃を催え又  
西園寺家の外琵琶を弾むるの家又此式あり近世故ありて十  
六日修を修す体源抄妙音院相國師長公妙音天を四条の北  
室町の東に造らるる毎月十八日妙音講を行はるる云云  
妙音天八弁才天あり

**座頭の涼**

十九日紀事六月十九日盲人納涼会あり是を涼といふ在京  
の檢校及勾当上首一人清聚庵は會り心經を轉讀を頭人  
檢校飯食應を設け六派の中替者四人を撰て平家を談  
ぶ暑氣甚し座席狭し故に檢校の外勾当上首其以下並  
は遠方の人未會むる及む

**座摩比御祓** 廿三日

社説播州西成郡の徳社坐元太神宮八十五代神功皇后三  
韓より帰陳しとあり神武天皇の古例よりて御船難  
波の岸浮見石の辺に寄る神靈安鎮の為齋しなまの地  
あり神功皇后十年庚子羅彼大江の岸田蓑の島に鎮坐  
浮見石今の御旅所 祭る所生井の神福井の神綱長井の神  
の鎮坐石ありとあり 祭る所生井の神福井の神綱長井の神  
右の三津井の神に竈の神名波比祇の神阿須波の神二  
座を加へて五坐といふ神名例祭六月廿二日夏越の大枝あり  
神輿御旅所は御脚あり鎮座の旧跡八軒屋の南石町あり

大江の岸より今天神按一名飯辺格といふ大江の岸の  
あり故は名く南の城内は属北八免餓野南北を田蓑の  
島といふいへ江口の辺に寄る當社の境内より未社ありと  
あり天正年中國に江に側近ありて延喜式坐元の社祭  
礼當日氏子の市民種々の齋り物を出し社に西横川の川  
上は床を構へ氏子の 形代を流し禊を修す 神代表然せり  
く神及び蠅声邪神あり復草木威能言語あり云々與傳  
抄に云くあまをといひて譬ハ夏のよりのみせり云々  
所き神のありありありをを云々  
あまをといひ六月をといひあり  
伏しと云四の庚を中伏といふ立秋の後  
初の庚を末伏といふ是を三伏といふ

**三伏** 陰陽書夏至  
廿三日の庚を初

の条下 **鯖釣** 時珍曰青魚亦鯖也作色を以て名く  
よ出 **鷺草** 和漢三才圖會  
和漢三才圖會奥州處處は草あり春苗を生ま麥の  
嫩苗の如し高さ尺をり六月芒を抽んで花をひく  
正白色形踏の如し故は名く連鷺草といふ一種あり  
高さ五六寸葉畧大く万年青の嫩葉に 櫻麻の  
て花白色踏千有餘群飛に似たり云々

部麻の条 **豇豆** 和漢三才圖會十八豇豆長大あり  
者本草に相混して其莢長きあり  
二尺に至るといふ者はあり夏至の前種を下し蔓長く  
籬に延其莢尺余ありその子十八あり故は俗呼ばる十  
八豇豆といふ六七月莢の嫩きものを煮て食ふ味甘

夏 さいき

夏 さいき



町より西樓門に入り二基の神輿と共ニ拜殿は安聖をその  
供奉四條芝居の役者等の先ニ提灯を張外面は各姓名を  
あし、高く是を擧ぐ祇園の町々も家毎に高く提灯を張  
り又六月十四日祭礼終り後神輿三基社頭は在支回一  
十八日の夜二基の神輿八直ニ神輿屋に入せ少將井の神輿  
ハ今夜の式の如し九神輿三基黄衣の法師三人各常にお  
せを預りて  
**金銀花** 各の部忍冬の  
**胡瓜** 時珍  
張騫西域に使へ種を得故に胡瓜と名く按ずるは拾  
遺録云隋の大業四年諱を避て胡瓜を改て黄瓜と正  
月二月種を下し三月苗を生きて蔓を引て葉瓜  
の如し四五月黄瓜をわき瓜をわき瓜とす  
**簪** 和漢三才圖会 此者葉口く潤くして末櫛の櫛干の  
形に似たり故に俗呼ぶをさかきとす五月花を  
用く本草時珍曰玉簪一名白鶴仙共は花の象を以て名を  
命を人室裁て花草と云二月苗を生して葉をよき高き  
尺むの葉ある莖白粒り如し其葉の大さ掌の如し團く  
て来りある葉上の攸車前の葉の如し青白色頗嬌望六七  
月莖を抽んつ莖の上は細葉あり中は花葉十枚枚を出さ  
長さ二三寸本は未だあり用ざる時ハ白玉の櫛頭簪の  
形に如し開く時微綻ふ四出中  
黄ちる莖を吐き頗る香し  
**秬時** 和漢三才圖会  
稷の每は食ふ今ハ唯磨末と  
一菓子餅として賤民用ふ  
六月祇園會 七月  
神社啓蒙二十二社註式二人皇六十四代四融院天祿元年  
六月十四日御霊会を始め今歳よりおせを行ふ紀事先七日  
の朝日の刻大鉾六本各四條通りを東洞院の西に出たれを  
ほるといふ六本の鉾各称号あり其中長刀鉾、團をとり

及たとも毎年魁首より先の鉾四條通り東の方の先よ  
あしよりて此鉾行ざる時次の鉾過るまゝあしより  
函谷鉾を分二とて洲濱鉾 或ハ 放下鉾と称すと  
り西の方の終りは西故に三本團をとり及た  
その間ニ鶏鉾菊水鉾月鉾三本船鉾一本並天神山  
飛天神山古手山太子山山伏山孟宗山琴破山白樂天  
山郭巨山芝荊山蟾螂山笠鉾山二本花盗入山木賊荊  
山岩戸山舟鉾以上十七本九鉾一本後山三本連行と地  
の六角堂にあつて取とらるる團の次ありと相傳ふ長  
刀鉾の長刀ハ三條宗近り作ありと民間瘡を患ふと此  
おせをいへる病愈るといふ九鉾毎は長さ十余丈  
余下は車輪二双を施し左右は大繩をつぎて數十人おせ  
を引たる年役は従ふお兒の上は乗り首は空冠をいへる  
腰は羯鼓を繫ぎ躍るをよき左右侍立の小童空扇を  
以ておせを揮揚を笛鉦大鼓おの物よきおせを拍を九鉾  
毎は一本一箇よりよりその大なる物車よのせをおせ  
を引京極を下り五條松原通りより各本所は還る神輿  
旅所は至て神を假宮に遷す十四日巳の刻なり山返り  
分一辨慶山々の次欽鹿山觀音山八幡山役行者山黒山  
浄明山鯉山以上八本昨日より所の團の次あり因ておせを  
渡り九鷹野山舟十船鉾團をとり及た此鉾三條  
通西の終りありより西ハ三條より東ハ京極を歴四  
條通りを過て各本所は還る同日午の刻なり三社の神  
を神輿に移し旅所を出し四條通りを西を歴て大宮通  
御供町に至り三社の神輿を安置し御供を献ぐ終りて  
後東の方三條通りを過京極を歴四條通りより本山に入る  
兩日前後の祭式古例  
あしありおせを略す  
**祇園臨時の祭** 十五日 諸神  
根元





歌未 飯 酢 毛吹草 和州南都飯 酢 ○世俗まて夏考 飯 酢 月あせを賞するあり其製多しといくとも京の六條南都

四月 水屋の能

紀事南都水屋川の南に水屋の社あり祭る所の神二坐素盞鳥尊稻田姫と云く此祭ハ伏見院の御宇疫病流行よりして始りて行はるなりハ神楽ホありたり也今ハ申樂四番あり地人能藝を施すあり四月四日五日

御形の日 祭の条にハ 三月過鳥

異名 躬恒抄 四月五月六月むかりあせバ、つきまきこい香といふ ○さみくせの香を唱をさくこいあもぞい魚此のつまきこい鳥 大和本草 細草ハ四月黄花大伴黒主 都草 大和本草 細草ハ四月黄花をいふ、花の形豎豆の花

密柑の花 本草綱目 樹の高さ丈餘其葉兩頭尖り緑色小

兼三夏物 短夜 明安 花橘と古哥よりあり

令廣義 夏至の節 昼六十一刻三十分夜三十八刻三十分

水鯉 和漢三才圖會 海鯉慈

水鯉 和漢三才圖會 海鯉慈 未詳按むは鱗類ハ灰色ハ黄を帶頭畧短蛇の如ク鱗硬く鬣短し下ハ碧の線文二三條あり大サ五六寸より尺半に至る 糸切齒水鯉水鯉 此節を賞す

蛭 月令孟夏月 蟻 鳴 蛭 出 本草綱目 土龍 地龍

海松 王子日記 崔禹錫 食鍾水松 狀松の如くあり

源氏葵の巻 千しろの底の

五月 通俗志 糸切齒 年浪草 ホミツゴロハ水

水鳥の巢 浮葉 字彙 鳥穴ニあるを窠といひ水鳥の

六月 御手洗詣 十九日あり 晦日まて 山城國愛

青藍按むるよ今も関東にてハ鼓虫をこつと備へといへり

馬虫の条にハ 馬虫と云ふ

六月 御手洗詣 俗志 御手洗詣 俗志 御手洗詣

の納涼 社をををの宮といひ、蓋地名よりて是を

稱ま社の東に御手洗川ありその水流冷みて溢せ流る

夏 五十七

夏 五十七

夏 五十七

夏 五十七

是後を修り七瀬の二諸人水臨て暑を避く犯事下鴨の社斗川合の社北前住吉の東の川辺にあつて六月後を修す十九日より晦日に至りて諸人参詣し納涼の遊びをなす林間には假し茶店を設け酒食及び和多加の鮎鯉のさし魚、鱧の梓焼、真桑瓜、林檎の果を賣或ハ竹串を以て小團子、数を貫き焼て賣る是を御手洗團子といふ御神代卷諸の神より罪を素盞烏尊に歸す科之、千夜坐の置戸を以て遂に促微鬘を抜去むるに至りて其罪を贖ふる亦曰其手足の爪を抜て賣るを贖ふ已よりて竟に逐降を乞ふ人夏を乞ふを乞ふを乞ふを乞ふ

**御祓川** 御祓を乞ふ川古より七瀬あり拾苴抄川合耳敏川東の瀧松ヶ崎石叢西の滝大井川

**道饗祭** 晦日公事根源是ハ疫神の祭あり毎年必行するべきこと近ごろハ他を侍るも鬼魅の他方より京路に入らんとる路上に供物を乞ふ祭に鎮火道饗の祭を四角四境の祭と申す

**水** 通俗志よ水を乞ふは是ハ卑賤の者夏日炎かけ合 暑に堪ふ水練のまねびる大勢集る其興に乗じ左右より互に水をあひせ

**茗荷筭** 頌 白蕺荷春初葉を生じ甘蕉に似たり根姜芽に似たり其葉冬枯根蘗に似たり堪より其性陰を好む木の下に在る生る

**水芙蓉** 貞亨式改名ハ新あり芙蓉ハ和漢ともは秋の部に入るは花を乞ふ

**水葵** 已本名 夏の白より證句とともへて

又鳧葵とも水鏡ともいふ葉の尊に似て夏黄花をいらく又白花のりたあり水中に生立て潔く人家近き池に生ぜを依て見れば人稀ありこまきを水葵とあひえたる輩ありあり浮菴ハ秋あり碧花あり混むへり

夏の白より證句とともへて 水葵 已本名 又鳧葵とも水鏡ともいふ葉の尊に似て夏黄花をいらく又白花のりたあり水中に生立て潔く人家近き池に生ぜを依て見れば人稀ありこまきを水葵とあひえたる輩ありあり浮菴ハ秋あり碧花あり混むへり

**四月白重**

時珍曰菅実牆蕪 草蔓葉靡靡依て生る故に牆蕪と名く其莖棘刺多し其子葉り生じ管星のやん故に管星を菅実と名く又曰春嫩き蕪を抽んで既長きと名く葉を成て蔓に似て莖硬く刺多し小き葉あり薄く細く齒あり四五月花を咲け出黄色白色粉紅の二色あり実を結ば簇り成る生ハ青く繁むれを紅あり人家に栽玩ぶりの草粗葉大に延長するや数丈花も又厚く大に白黄紅紫の各色百葉ハ出六出の花あり大和本草野 薔薇花白

**新樹** 己の部五葉 元帝纂要夏草を茂草と

**梭欄の花** 時珍曰 瑞草中よ於て敷の黄苞を出入苞中よ細子あり列をなす乃ち花を孕め之状魚腹の孕子が如し尾を梭魚亦梭笋といふ漸く長し苞を出さずハ花

**芍薬** 穂を成て黄白色実を結ば累りして大豆の如し 牡丹に似て狭く長し一二尺夏の七のの花をいらく紅白

茶の敷種あり子を結ぶ牡丹の子に似て之秋時根を採る○時珍曰芍薬ハ婢女のやハ婢約ハ美好き良草花

夏 又志 五六

夏 又志 五六

夏 又志 五六

夏 又志 五六

夏 又志 五六

の密焯約く故は名も○董子曰芍薬一名將離別ん  
とむる時おをを贈ふ○花の宰相をいふ葉をいふ舟良  
好草木の異名あり其頭假字  
の部より註し一多  
**胡蝶花** 和漢三才圖會鳥扇是

今云胡蝶花あり四月花をいふ其鳥扇の花は似て小  
し灰白色黄の杖あり実を結ると一種も著我あり小  
しを長さ六七寸石菖の葉の輩のあり一花もあり小  
し浅紫畧若蒲の花は似てまき美し愛せり  
**及** けの部蕙 **羊蹄根** 花の各註す **四手の** 白

**田長** 備前國の田長は或書よひ田長の名是より○越谷  
は時邊をいふ越谷と云ふ田長の名是より○越谷  
吾山は凡諸を皆三指只杜鵑のこ四指ありとの樹上は  
宿をいふと云ふ二指前より白く二指後よりむの四手の田長は  
是をいふと云ふ或ハ死出と云ふをいふハ非ハ古今いふを  
く田をつくをいふと云ふ

蜀魂 蜀魂は蜀の魂なり蜀  
王本紀望帝其臣鼈靈が妻を淫し乃千位を禪り亡  
去ぬ時子子規あり故は蜀人杜鵑の啼を見て望帝を  
悲し謝豹 五雜俎 謝豹は蜀の杜鵑を以て死せ人をこれハ足  
を以て面を覆ふ蓋る状の如く故は杜鵑の  
声を聞ハ則死せ故は

**賤鳥** 和漢三才圖會鹿  
鹿の角の生る白俗は以て葷菌の字と云ふ鹿の角初  
て生む未開りなる葷菌は相似く故は然り長さ二三寸

**鹿の袋角** 和漢三才圖會鹿  
鹿の角の生る白俗は以て葷菌の字と云ふ鹿の角初  
て生む未開りなる葷菌は相似く故は然り長さ二三寸

**三夏物** 新茶 古茶 紀事此月茶を製して諸方の人  
壺を携へ新茶を領納し然後壺を  
出清冷の地寄て盛暑土用の暑湿を避く洛外愛宕山宜とい  
凡茶を製する前後の次第あり故は摘茶の時焙茶の時擇茶  
の時と云○古茶と云ふ新茶の對し紙帳 紙を以て作りたる紙帳之  
は古名新古とも夏季と云ふ紙帳 紙を以て作りたる紙帳之  
は古名新古とも夏季と云ふ紙帳

**紙帳賣** 帳より冬ふあはてんとくト紙帳といふ物を  
商いたるが今ハもくはし云此飛鳥川ハ享保出生の老人の筆  
記に元文寛保の頃までハ此商人来りあるべし○向の  
岡 延宝八 列立や下りか 年刺 虫 毛吹草 越中の松皮箱俗  
中も紙帳賣、互澤 **蛇** 地の蛇といふ龍は似たり  
故

**鹽鳥賊** 南越志其性を嗜み自ら水上は浮ぶ  
也飛鳥是を見て死せりと云ふをいふ鳥  
を賊害ハバヤウといふなり夏香よ用ふハ辺土山中ハ  
どの海濱は遠き田舎のてあり江戸大坂ホの繁花も生鳥  
賊春より四五月より取り取中ありて塩鳥賊を用ふる也

**新麥** 本朝食鑑早きものハ三四月熟し晩き  
ものハ五六月熟し是新麥の候なり

**蒹葭** 和名抄蓴 奈波 蒹葭類書水中に生る葉  
は至る莖細く銀の股の如く黄赤色短長水は随て深淺あり  
名づけ蒹葭といふ噉ふ堪ふ味甘く寒あり十月漸く  
粗硬し十一月萌

**紫蘓** 時珍曰蘓ハ蘇ハ從音蘇舒  
暢多蘓の性舒暢して氣

**紫蘓** 時珍曰蘓ハ蘇ハ從音蘇舒  
暢多蘓の性舒暢して氣

**紫蘓** 時珍曰蘓ハ蘇ハ從音蘇舒  
暢多蘓の性舒暢して氣





リ形片板の如きり秋夏を賞む  
干河豚 同上  
名護

鐵く刺し酒醬を和して贈り代女  
屋簾より背黄赤より白點あり棘鬚あり腹白く味美  
あり惟皮を剥て身を乾し皮簾と名づく夏月雁と  
し是 同上 蛙ハ水中の湿り生むるものなり海帶昆布  
を食す 蛙を久しく雨水中に浸すと其色ハ共より化して蛙  
と云ふ性石灰食塩を忌む試み 蟾蜍 龜頭曰蟾蜍多  
塩を蛙に點せざる盤縮して死す 蟾蜍 人家の下の濕  
処に在り形大く背上有麻毒多し行て極め遅く後一  
跳躍ありあつたる鳴き 抱朴子蟾蜍十歲頭上は角  
あり腹の下の丹青を肉芝と名づく山精を食ふ人ハ世  
を食ふことを得れば仙と云ふ術家取用して霧を起  
し雨を祈り兵を辟け縛を解く今枝 畫寢 笈日記  
ある者蟾を聚て戯しむる指使をきく

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

干河豚 同上  
名護

蟾蜍 龜頭曰蟾蜍多  
塩を蛙に點せざる盤縮して死す 蟾蜍 人家の下の濕  
処に在り形大く背上有麻毒多し行て極め遅く後一  
跳躍ありあつたる鳴き 抱朴子蟾蜍十歲頭上は角  
あり腹の下の丹青を肉芝と名づく山精を食ふ人ハ世  
を食ふことを得れば仙と云ふ術家取用して霧を起  
し雨を祈り兵を辟け縛を解く今枝 畫寢 笈日記  
ある者蟾を聚て戯しむる指使をきく

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

五月 辟兵繒 茶の部長命儀の  
て笑ひそめ

闘百草 劉公嘉話唐の中宗の朝安樂公主端午  
剪弄 歐陽公園草詩ニ云共三園今朝の勝盤梅百州  
香 心を望む日 番の茶の注と云 未央柳  
園史金然桃の莖幹二三尺叢生を其葉柳に似て梅雨  
ふる時黄花は桃に似て甚長くして金茶の如く

姫百合

時珍曰山丹其葉長うて狭く尖り柳の如  
の花を開く根少し 菱の花 時珍曰菱一名菱其葉  
の角稜峭し故にこれを菱と云ふ三月蔓を生じて延引  
葉水上に浮ぶ扁より尖り光面鏡の如く葉の下に茎の  
蝦股の如く一茎一葉両々相差し蝶の翅の如く五月小  
白花をひらく日は背きを畫合し宵炕支月は随つて  
轉移

廣志枇杷ハ冬華を實黄より鶏子の如く小なりも  
のハ香の如く味甜く酢ト一書云其本隱密婆娑と  
て愛をべし四時調す茶驢耳の形を有る毛あり盛冬  
白花をひらき三四月に至て実をまき球を作して黄梅の  
如く皮肉甚く滑く味  
甘く枝ちんき栗の如く

六月 氷室 日本紀仁徳  
天皇六十二年  
五月額田の中大彦皇子圖鶏は獵す時皇子山上より望  
て野中を瞻み物あり其形廬の如く仍て使者を遣は  
しを視せしを還り来りて曰窟あり因て圖鶏稻置大山を  
を呼ぶを問曰其野中も何の窟を啓して曰  
氷室あり中皇皇子を氷を將來りて所は獻て天皇古  
世を歡ふ是より以後毎季冬に當て必氷を藏め春分の  
始に至て  
氷を散ふ

氷室御調 公事根源主水司四月一日よ  
里九月の月盡す是を  
まら

氷のおもひの氷水 氷のおもひは  
を御膳も氷を用  
るをり氷水と云源氏物語も  
と云枕草紙も中よりあるをせ

氷のおもひの氷水 氷のおもひは  
を御膳も氷を用  
るをり氷水と云源氏物語も  
と云枕草紙も中よりあるをせ

氷のおもひの氷水 氷のおもひは  
を御膳も氷を用  
るをり氷水と云源氏物語も  
と云枕草紙も中よりあるをせ

氷のおもひの氷水 氷のおもひは  
を御膳も氷を用  
るをり氷水と云源氏物語も  
と云枕草紙も中よりあるをせ

氷のおもひの氷水 氷のおもひは  
を御膳も氷を用  
るをり氷水と云源氏物語も  
と云枕草紙も中よりあるをせ

氷のおもひの氷水 氷のおもひは  
を御膳も氷を用  
るをり氷水と云源氏物語も  
と云枕草紙も中よりあるをせ





亦紫色高きもの三四尺畧雁来紅に似て美あり五色菟  
 亦十葉錦に似て共庭園に種を愛するなり獲鱸輪  
 黎菟此三種ハ夏和漢三才圖會 姫瓜瓜俗稱葉瓜  
 季の菜菜あり五六月や瓜を生入大さ二才か  
 里四一を浅青色味苦く食ふべし穀とさるべきハ稍  
 く黄微甘いとて食ふも堪ざ雍州府志 九條の田間  
 より出又大き梨のていし其色至る白し故に姫を以てこれを  
 称す女兒この瓜を求て少くををとりぬ白粉を其面に傳  
 墨を以て鬢髮眉目口鼻を畫き水引を以て其莖を結  
 び提揮て玩具とす統株蓑集 姫瓜や神に入てりあか  
 らど至曉 醬造醬ハ將ありあり食物の毒を製する將の  
 暴悪を平ぶるなり引飯 飯の部なり冷水賣  
 ○製法畧之飯の条ニ出ス  
 江戸の街頭は手桶一荷を  
 あり炎暑は冷水をうみ  
 扇を賜年中行夏歌合 夏冬季あらはる姫は臣下は脚  
 扇の拜酒をよび政をきこめまを久旬とくまへくさの政  
 のどと玉ふ旬ふふの義あり内裏あらはるく造る  
 せく初は南殿まで行はせくあらはる新所の旬と申る也此  
 四月の旬は内侍扇をも上達部はたす  
 ひとをつきて請取作法ありなり  
**杜本祭**  
 上の申河内国安宿郡 国分村祭る神二座齋大人神  
 津至の命とて香取大明神是あり公事根源  
 杜本祭四月上申日之神社河内国あり午の日使く仁  
 和五年四月は祭初河内志杜本の神社はけり古市郡  
 駒ヶ谷あり式は安宿郡は属すとあせしと一向とも所志  
 せむと駒ヶ谷村と国分村と領つぎの故也或人云國

**も** 四月 孟夏旬

**杜本祭**

分村火の谷と申とこのを當時杜本の宮と唱へ来り古代  
 ハ杜本千軒と坊舎千軒あり勅使奉向あり申  
 傳る之を近辺土中より古瓦を折く掘出るといへども社頭と  
 申てもいへども大木の樟ありとも木はなほあつた春を  
 花咲くは常ありぬ木立ゆ多神木と申傳るのこころ四  
 五十年以前山田の日陰とを以て山の持ぬ善九郎と  
 りし者伴の樟を伐りけりよは斧のけり柄をけり残る俄  
 山一面は焼出伴の斧ハ善九郎ありけり一飛來る程あり  
 善九郎は妻病死火の谷明神の影向とて村中  
 騒動してよりあま小祠を建て神樂を奏し神慮を慰め奉  
 りぬこの崇りよりて杜本の宮の奉り穿鑿する所の善九郎  
 方より古き書物の證とてまじり伴の善九郎もこの節次第は  
 死果ややく九歳の孫一人残せしより親族ともち寄  
 書物穿鑿してありともありとも木を伐りてをせり  
 その末孫今は明神と異名を呼來せり近年国分村の枝  
 郷にん所と云ふ信仰し奉り小社の上は覆ひをまつ  
 り九月九日御酒燈明を捧げ祭るとあり○延喜式は杜  
 本祭夏四月冬十月並上申の日まを祭るとあり  
 といひて古き神社あり今考ふべき物あり善九郎より  
 取出せる筆記あり奉り記あり人見あり人ど  
 あり  
**諸葛** かの部加茂 祭の条よ  
**文字摺花** 大和本草 莖の長さ  
 尺三寸餘葉ハ百合のさくを狭く四五月は花ひく  
 紅白色花連なりてあり一莖は十餘つらあり  
 菴の下に園は  
 植て賞翫す  
**五月** せやゆひ草 或人 云糰  
 ありと證  
**藻荇** 藻舟 藻の花 時珍曰 藻ハ水州  
 亦未考



箏諸州よりあり味は苦こ多  
くしを味と微あり多く食ふ耐不  
無三夏物 涼

風土記 仲夏長風扇暑注云坊節東  
南の風常より俗は黄雀長風と名づく 鶺鴒 和漢  
三才

園会鶺鴒を醸す法塩少一糝一を壓と一と二日み  
了熟る○宇治丸地鶺鴒を飼つ鶺鴒早鶺鴒一夜鶺鴒飯鶺鴒  
月夜ホの鶺鴒あり其韻字の 雀鶺鴒 毛吹草撰州福島  
部よりありて注しなり 雀鶺鴒の雀詰是江鶺鴒とい  
ふ魚ありての大き雀不どありて魚の腹に飯を多く入  
るが膨る雀の形よく

馬齒莧 倭名抄馬莧  
和名時珍  
馬齒莧其莖比拉して馬の齒の如し園野より生  
る六七月細花をひききく実を結ぶ 和漢三才園会  
其性剛強して倒檐の如し懸る日を経る猶活る景天  
草の強くし大和本草此草を軒よりくを馬齒内子  
入らむ

五月 住吉の御田植 廿八日 摂陽群  
談撰州

住吉神田を植る以て神事を行ふ相傳ふ神功皇后三  
韓を行たす帰陣のとき長門國より植女をめぐりて  
五穀農業のてをせし廣く志すあふその季乳守の志  
女とありぬあせより遊女今早をめぐりてつとむといふ  
又紀事追加泉州堺乳守の妓女のうち物もるところの  
奉公年季明けく女三人来りてあせを植今日神殿を  
植るのち妓院の暇をぬむといふて住吉の御田植古畫  
にもこえて紅深の千早は似るを着し赤き袴は市  
女多をいぬく是古代の姿の残せる之今た植る真似  
をあらむ 水馬虫 漢名水黽 ことかせ己其身細長く  
のこあり 五六分ばかりの黒き虫あり長き四

足あつて身は水よつる水上を馳るていつ依る水馬と  
名つて截肉西土より塩煮江東の児童シランシホといふ  
筑紫よりアメカタといふ其臭地黄煎の臭之園東ケンボ  
ツホウ 其色黒赤よりて鯉節は似たり故に鯉虫といふ  
一説は此虫味は甘く似たり故に錫賣 忍冬花 忍  
今江サのナカ言はアボウといふ

この部 透百合 和漢三才園会白黄紅の數種あり  
こべし 上より向しつら花鮮明なり  
ゆく美之奥 未摘花 への部紅藍 李 八閩通志  
州より出づ 李 食貨ノ部  
云李其品一あり白李赤鸞黄と名づく実清く脆し五  
六月熟る臙脂李ハ皮肉共紅あり味甘く夏熟る琥珀  
李ハ皮紅より肉黄く味  
微波 秋熟る

六月 住吉の御祓

同火替 撰州住吉の社僧御祓を修むるあり紀夏六月  
晦日 小あせ廿九日を用ひ大あせを晦日を用ふ当  
日毎年神輿を昇の輩住吉の松原に宿し潮に浸る  
垢離をあらし今朝神輿基を宮前より寄る社僧祝詞を  
誦して神をうつしつら後社司六七十員騎馬して奉  
供を既して神輿塚の御旅所より是より先替六七輩  
素脩を着し茶磨をせしき騎馬して神子先どもを  
輿住吉に還る塚の市民手毎に炬を点してあせをもち  
迎送相連るを白晝の如しあせを大替といふあせの日大和  
国神妙寺山の土をとつて神輿よるあせを塚を塚  
の宿虎神素あせは名越の夜もあせ荒和の夜と云也 菅  
貫 ちの部茅の輪 納涼 夕まみ 炭俵集夕ま  
の条に注す 橋

野坡五元集千人 涼臺 開元遺事  
其角 伏の中おとよ林亭の内よ於て畫柱を植錦を以て倍び  
涼棚と坐座具を設け名妓を召て日く坐せぬ遊よ  
相避暑 秘藏抄をくらりて付ていさ  
すづき玉 月をてしを月の色をまじ  
しをよの影のしをこも 朗詠燕昭王招涼之珠当沙  
月号自得 玉を燕の招涼珠をいふ  
管菊 和漢三才圖會 管本綱よ載て蓋荊三稜  
の属ひよて根異あり香附と扱帳釣草と  
の異ありし按せり 管の葉ハ芽よ似滑澤よて  
莖よ白粉あり云々 今云管ハ葉よ劍脊ありて硬く靱  
ま莖の本白し別よ一莖を抽んて穂を出ま 曹 時  
六月葉を折て乾せ白粉を子健しよる義あり 玳 玳  
日其状蠶の如し大さ身短く節促り足長く毛あり 樹  
根及よ糞土の中よ生むるは外黄内黒旧き茅屋の上  
よ生むるは外白内黒皆濕熱の氣 水飯 洗飯源  
薰蒸て化生又夏より秋よ入蛻て蟬と成 氏物語  
常夏蒸二あほもきあひらふてつめしをせんあまらう  
よさうとさつてつらふま 弄花云干飯あとの乾水つけ  
○或御説よまわんとしてひめし  
云飯をあつてつらふしを食ふ物

追加 五月 天仙菓 月令博物筌和州  
の山中よあり花よ  
くしを実を結ぶ枇杷よ似  
る小こしや兒好んで喰ふ  
大和本草 和是亦俗のつけり處あり葉ハ  
落の葉よ似てあり黄の花よく

茶筌草 麥の事を茶筌草といふ  
穂の形を見まらふ  
五月朝 露草 茶切齒下學集よ錢朝露州と出ま一名銀  
錢花といふ花の形楮よ似てわく色白く  
瓜の葉よ似て高さ二尺をかり朝よしき夕よしき  
草石蚕 異名を甘露子土蝸滴露地瓜子といふ五  
月根を掘蒸し喰ふ味百合の如く根老蚕  
の如く故よ

四月 盧陀草 月令博物筌及  
び四季部類等  
あせを四月の部よ出ま見ハルフダハ唯ルウダといふ秋  
のオトメ花よき秋の季この大和本草ハルウダ近來紅  
夷より來ま是紅夷ルウダより葉ハ細くして莖のりよ木のお  
と三四月黄花を結く四出よし一片の間あの一葉を  
出ま花の心よ実あり若梨の實よ似て夏夏のもの年子  
をよけを來年花咲まふその葉莖根あつて枯むる  
州常のルウダの性よ似て性猶まをせり  
常のルウダより惡臭あり

車前草の花 秋の部  
喜祝よ用ゆるを以て正月の部よ  
載るるの條下よ注し  
な 五月 刀豆の花  
秋の部  
む 六月 律茂る 和漢三才圖會 本  
よ生む二月苗を生む葉よ細き刺あり葉節よ對して生  
む一葉五尖微莖麻よ似て細き齒あり八九月細き葉花を

追ねなむうくやあさ 本七

追ねなむうくやあさ 本七

追ねなむうくやあさ 本七

追ねなむうくやあさ 本七

追ねなむうくやあさ 本七

追ねなむうくやあさ 本七

追ねなむうくやあさ 本七

追ねなむうくやあさ 本七

追ねなむうくやあさ 本七



增補歲時記彙草夏之部終

业巨摩郡

清哲村

武藤

購米

中々々々 鬼洞



